

サル所以ナリ

内務卿
又曰

殖産ノ業起ルヤ各地方華士族中尤人望アルモノヲ撰ミ之ヲシテ
率先セシムルヲ良策トス何ソヤ從來開拓ノ業ヲ起スモノ多シト
雖全成スルモノヲ見ス而其間痕ヲ留メテ失ハサル者必ス人望家
ノ率先ニ由ル不可不注意也

内務卿
又曰

愈々着手スルニ及テハ必ス數名ノ官吏ヲ要スヘシ足下宜ク知ル
所ヲ舉ク可シト

時正ニ八時ニ近キヲ以テ辭シテ去ラントス内務卿曰某出仕未タ遅カラス
暫ク止マレ猶告クヘキモノアリト於是止ル

内務卿曰過ル日離宮ニ於テ殖産ノ事已ニ談示ニ及ヒタレモ其意ヲ盡サ、
ル處アリテ地方官ノ貫徹セサルアランコトヲ恐レ東京府知事楠本
正隆氏へ托シテ更ニ地方官へ懇議セシメントスレモ今朝ノ面晤
ハ幸ナレハ意中殘ラス告ケントスルナリ抑 皇政維新以來已ニ

十ヶ年ノ星霜ヲ經タリト雖昨年ニ至ルマテハ兵馬騷擾不肖利通
内務卿ノ職ヲ辱フスト雖未タ一モ其務ヲ盡ス能ハス加之東西奔
走海外派出等ニテ職務ノ舉ラサルハ恐縮ニ不堪ト雖時勢不得已
ナリ今ヤ事漸ク平ケリ故ニ此際勉メテ維新ノ盛意ヲ貫徹セント
ス之ヲ貫徹センニハ三十年ヲ期スルノ素志ナリ假リニ之ヲ三分
シ明治元年ヨリ十年ニ至ルヲ第一期トス兵事多クシテ則創業時
間ナリ十一年ヨリ二十年ニ至ルヲ第二期トス第二期中ハ尤肝要
ナル時間ニシテ内治ヲ整ヒ民産ヲ殖スルハ此時ニアリ利通不肖
ト雖十分ニ内務ノ職ヲ盡サンコトヲ決心セリ二十一年ヨリ三十年
ニ至ルヲ第三期トス三期ノ守成ハ後進賢者ノ繼承脩飾スルヲ待
ツモノナリ利通ノ素志如此故ニ第二期中ノ業ハ深ク慎ヲ加ヘ將
來繼ク可キノ基ヲ垂ル、ヲ要ス湖水疏鑿移民開拓并大隈川通船
等ノ事業充分其必成ヲ期シ鹵莽失敗シテ民ヲ困シメ國ヲ害スル

ノ慘狀アラシムヘカラス目的ヲ三十年ニ定メ第二期中創爲スル所ノ業ハ滿期ニ至リテ全備センヲ希望ニ不堪ナリ此精神タルヤ獨リ地方長次官ニ止マラス屬官ト雖樞要ノ地ニ立ツ者ニハ篤ク貫通セシメ上下戮力至誠運籌センヲ欲ス

盛典曰 願ハクハ股肱ノ力ヲ効サン

右畢テ盛典ハ辭去シ内務卿ハ直ニ參朝セラレタリ途中時辰ヲ閱スルニ已ニ八時元老院ニ至ルヤ否紀尾井坂ノ凶報アリ盛典愕然夫大久保内務卿

聖上ヲ補佐シ内政ヲ負擔シ一身ヲ以テ國家ノ安危ニ任セリ斯人ニシテ斯變アリ嗚呼悲哉今ニシテ前言ヲ回想スルニ誠意凜然死スルモ猶生ルカ如ク感激ニ不堪モノアリ則大久保内務卿生前最後ノ善言ニシテ殆ト遺言ト稱スヘシ盛典既ニ生前ノ誓アリ死後ト雖曷ソ其志ヲ空クスルヲ得ンヤ事業ヲ實地ニ推擴シ誓テ國ニ報セントス依テ當日ノ問答ヲ記シ他

日ノ警醒ニ備フト云爾

明治十一年八月

福島縣令山吉盛典記

跋

我縣令山吉君恒誦故大久保卿臨終之語曰精神如此吾當誓成其業也今手錄其問答更使余刪正焉余受而讀之至誠凜々憂世任國之氣象自溢乎言外想望其精神風采有不堪悲感者矣夫本縣明治六年夙興開拓之業擴充愈力而闢荒蕪殖士產之事則余亦窃存宿志官又令負擔之安得不私淑以奮勵哉刪定方成題曰濟世遺言謹跋一言

明治十二年四月

福島縣大書記官中條政恒

【解説】五月十四日朝偶訪問セル山吉縣令ニ對シ利通ハ起業公債發行ノ趣旨ヲ説キ福島縣安積郡開墾ニ關スル注意ヲ與ヘ更ニ今後ノ經綸ヲ説クトコロアリ後山吉カ記念ノ爲メ其顛末ヲ

記シタルモノニテ本卷所載ノ内容ト頗ル關聯セルモノナルカ
故ニ特ニ收メタリ猶ホ起業公債ノ訓示ニ對スル楠本東京府知
事ヨリノ書翰ハ遭難ノ際携帯セルヲ以テ書面及ヒ狀袋ノ上部
ニ班々血痕ヲ存シ記念ノモノナレハ次ニ掲ク

【参考】楠本正隆より大久保への書翰 明治十一年五月十三日 (大久保家藏)

今般御施行之筈ニ有之候起業之御趣意各地方官へ貫徹候様御委托ニ
任セ明日一會相開不日其返答可入御聽候間左様御安心相成度扱先日
來御内談仕置候立論之件則同意之事も有之上ハ速ニ政府ニ於テ御
評決相成様御取計被下度則寫壹通御廻申置候御落手被下度此段尙拜
容ニ相殘置候不具

五月十三日

正 隆

大久保利通殿

大久保利通文書補遺

大久保利通文書卷四十六

大久保利通文書卷四十六

一六七一 森山與兵衛への證文 嘉永四年六月廿八日 (大久保家藏)

【按】父次右衛門流島中家計ノ困難ニ際シテ借入金ノ證書ナリ

證文

太刀

壹本

代金廿兩[㊦]

兩ニ付七貫五百文替[㊦]

錢ニノ百五拾貫文[㊦]

右々此節無據入用ニ付致御借用候儀別條無御坐候右爲引當本行之品差上置候拾々年内金子入付候々御返可給候若年限相不合候々御勝手次第御取計可給候依々爲後日證據人相立證文如斯御坐候已上

卷四十六 (嘉永四年六月)

嘉永四年辛亥六月廿八日

證據人

皆 吉 金 六 ⑩

借主

大久保正助 ⑩

森山與兵衛殿

一六七二 森山與兵衛への證文 嘉永四年六月廿八日

(大久保家藏)

【按】前書ト同シ借用金ノ證書ナリ

請取

金子三拾四兩壹部 ⑩

兩ニ付七貫五百文替 ⑩

分ニノ貳百五拾六貫八百七拾貳文 ⑩

右ニ通御借用金儘ニ相受取申候已上

辛亥六月廿八日

大久保正助 ⑩

森山與兵衛様

一六七三 石原直左衛門への書翰 嘉永六年六月四日

(大久保家藏)

【按】金子八兩ノ借用方ヲ依頼セシモノナリ

愈御堅勝珍重奉存候扱彼方へ壹封したゝめ置候付拙宅の様八太御遣可被成候然は近頃申上兼候得とも無據入用之儀有之別亦當惑致居候時宜御坐候付何卒金子八兩丈御拜借被成下候儀相叶申間舖や當分如何程有之候ても足り合不申御時節あく迄推察乍仕實に不分別至極と思召候は案中殊に此内莫大之御世話に預り候亦旁鐵面とも何とも難申上御坐候得とも願くは御才角被成下候様萬々奉伏願候とても八金丈相調不申候ハ、五兩たけよても宜舖御坐候得とも可成は皆目申上候通り御都合被下候得は別亦大幸難申盡候彼方致相談候とて圖にのりて打付候御難題申上候様御胸中よ

も恥入候得とも全く左様の譯も無之無據も發言仕候次第何卒御憐察可被下候昨日も御相談申上度所存御坐候得共さりと申上候面皮も無之近頃乍大略以書中此段御相談申上候何も面上可奉多謝候以上

六月四日

追ふ今日上様興國寺御參詣ニ付詰ニて急き罷出候事よて亂筆偏ニ御免可被下候

石原直左衛門様

大久保正助

要詞

一六七四 石原直左衛門への書翰 嘉永六年十一月卅日 (大久保家藏)

【按】金子三兩ノ借用方ヲ重ネテ依頼セシモノナリ

愈々御堅勝珍重奉存候扱先夜は御入來被下恭御禮申上候然々近頃赤面と申も愚の至いかに顔の皮鐵石たりとも被申上丈ニ無之候得とも金子參兩

御借用被成下候儀相叶申ましくや當月御製藥方へ利足上納有之此に見當置候へ共先日よりの一件に仕込み候ニ付差當り活計無之無據御相談申上候私參り奉願筈ニ御坐候へ共あまり度重り候事よて御直に發言ニ面皮も無之兼る愚親ニ節季仕舞用ニ事迄も御世話可被下仰被下候由御懇情言詞ニ難謝就るを御存通ニ事ニ御坐候得は何れ不得恩借候を相叶申まし候付何卒可然様奉願候右參兩其内ニ御見込御世話被成下候へは別々多幸奉存候此旨乍大略以書中奉得御意候尙罷出深く可奉謝候所用迄早々以上

十一月三十日

亂筆御免可被下候

石原直左衛門様

大久保正助

要詞

一六七五 堀次郎への書翰 文久二年五月二日 (牧野家藏)

【按】同行ノ約束ニ付キ都合ヲ問合セタルモノナリ
今日ま如何被成候や些遅方相成候間一先御伺申上候遠方あらハ明日ニ
もいさし可申候以上

五月二日

大久保一藏

堀次郎様

内用

一六七六 藤井助市への書翰

元治元年三月十一日 (谷田部太郎氏藏)

【按】地頭取次ノコト及ヒ歸藩ニ付キ老母へ事情談示方ヲ京都
ヨリ依頼セシモノナリ

一筆致啓上候春暖相催候處被爲揃愈以御堅勝被成御坐珍重御儀奉存候隨
亦私無異相勤申候付乍略儀御降慮可被下候先便ニ御狀被下難有御禮申
上候地頭取次之儀家村曾兵衛殿に御頼被下候由島津求馬殿も其段申遣

給候同人ニ候得ハ近所之事ニも有之彼是仕合之至宜舖御傳置被下度御
願申上候一禮ニも申遣等候得共乍毎取込候故其儀不相叶候付追可申
遣付其段も宜舖御申入置可被下候扱私儀蒸氣船被差下候段御内達承知
仕追々協方ニも相知を候ハ老母心配も可有之歟ト形行飛脚ことよ
申遣置候次第御坐候然處船之儀も大砲十二挺卸方別六る舖當分ニ
ハ急ニ御濟之處六る舖且亦御用筋も段々多端ニとふても延引之方ニ相
成可申候付左様相心得候様以御賢慮御申聞置可被下候當分之事候得ハ模
様ニ依ハ御差留相成候儀も難計事候故其節ニ臨ミ氣落チ不相成候様
〆〆以御舍御諭解被成置可被下候近々松方助左衛門殿被致出立候付其
折尙又委細申越候様可致候先ハ御禮旁御願申上度早々如此御坐候以上

三月十一日

大久保一藏

藤井助市様

追亦直二郎殿別元氣ニ御坐候付少も御懸念被成ましく候乍毎多

用中そこく之文面御免可被下候

【解説】利通ハ文久三年秋ヨリ京都ニアリシカハ母ノ富久子ハソノ否安ヲ念シ只管歸藩ノ日ヲ待チシヲ以テ豫メ老母ヲ説諭セラレンコトヲ叔父(母ノ妹婿)ノ藤井ニ依頼シタルモノニシテ遂ニ利通ハ四月十八日久光公ニ隨從シテ歸藩セリ大砲ハ磯集成館ニテ鑄造セルモノニシテ京都ノ變ニ備ヘントセシモノナランカ追書直二郎ハ助市ノ長子ナリ

一六七七 藤井助市・石原直左衛門・同正右衛門への書翰

慶應三年四月十三日

【按】京都ヨリ刀劍手入レノコト祿高買入レ等ニ付キ親戚へ依頼シタルモノナリ

追々薄暑ニ相向候處御家内御一同様御揃向以御安康被成御坐恐悅御儀奉存候隨而私事無異儀相勤申候間乍略義御降慮可被下候乍恐

中將様益御機嫌克昨日四ツ時

御着京恐悅之至御同慶奉存候別而御當地賑々舖罷成申候直二郎殿ニも別而元氣ニ而着被致大坂ニ而ハ寛々咄も得不致候へとも昨日則見舞給り委舖御傳言直左右共承り皆々様は御逢申上候様ニ御坐候大ニ安心仕候御同人義ハ何歎氣を付心添はし申候間少も御懸念被成ましく候其段叔母は御申入可被下候御兩所生子も日々成長之筈相察申候直二郎子へ祝義申入候處是ハと被申候計ニ而大笑らひはし申候

一助市様は申上候谷山刀磨方之義始末もとゞき兼候付先見合候様云々之趣い細承知仕候右ハ差當り入用も無御坐候へとも最早三年位遣置餘り長延候故申遣候事ニ御坐候尤銘打たのミ入方野村助七請合くを候付ぬり磨迄ニも成就白木繰込はし年號月日京都岡崎ニおひて打調候譯銘打をらひ置度御坐候乍御面働何卒宜舖御願申上候

一高取入之儀御頼申上候處右ハ究士等へ被下候筋御吟味共ニ而當御役相

勤候不餘目立やうの事共候ハ、先御見合置可被下候そは丈之事ニ
無御坐候ハ、最早相後を候歟も難圖候へ共四拾石位も相調候ハ、取入
置度ものニ御坐候一時ニ其通参る候ハ、其内ニ亦もよろしく御坐候
右料錢之儀ハ甚御手数相成事ニ御坐候へ共里村方へ三百金岩木方へ當
年中之處ニ亦三百金位御相談被成下ましくや若三百金丈出來不申候得
ハ二百金ニ亦もよろしく御坐候えり當年中都合六る舖候ハ、二百金
位ハ七八月迄ニ返金之處ハ出來申候付其筋ヲ以精々三百之處ニ御相
談被下度御願申上候其内私罷下候へハ考も御坐候へとも懸る之事御坐
候故餘計之御配慮懸上候事ニ御坐候若亦被仰談外ニ能御工夫も御坐候
ハ、不目立様御取計置被下候へハ別難有奉存候適館内も被仰付置候
付此節小番新番等持高員數御治定被仰渡候ニ付ハ賣拂高多く可有之
まぐせざる機會与相考持高ニ亦も成置候へハ難有被仰付候詮も相立候
事故間後をあら分る御相談申上越候館内方外ニ借入之金子ハ三百金

位ハたとひ罷下候も八九月迄よ返辨之見留ハ有之事御坐候間其
邊も御考合之上可然御談合可被下候えりあるら前條申上候通究士限
ニ買入候様ニとの向ニ御坐候ハ、御取止可被下候勿論御役料高之内ニ
拾石位ハ返上いさ候所存も御坐候付其段ハ考合之上尙追申上候へ
共尙更右之段不願自由御願申上候事ニ御坐候何分ニも御三人様篤与御
熟談之上可然様御取計被下度萬々奉伏願候岩木事ハ當分大坂ニ亦候へ
共罷下等ニ亦候間大ら此舟々下可申若下不申候ハ、大坂ニ亦相
談いさ置吳候様税所に申遣申候

一直左衛門様ニハ御下則より御旅行之由最早御歸旅候筈与奉察候大坂
平野屋源藏之爲替ハ儘ニ相受取申候間左様御安心可被下候
一 正右衛門様屋敷御申請之一條先便ニも申上候通いち壯之丞に相頼遣
候間罷下次第御出御直ニ御頼可被成候橋口彦二掛ニ取調候由御坐候
間同人へたのミ可吳与之事御坐候間若早目壯之丞事不罷下候ハ、別紙

さし上候間御持參橋口は直々御頼見可被成候自然上山寺地面間ニ逢不
申候ハ、外ニ御見立可被成候

右御頼申上度用向迄艸々如此御坐候尙奉期后音候頓首

四月十三日

大久保一藏

藤井助市様

石原直左衛門様

同 正右衛門様

追ふ叔母き地ミへよろしく御申入置被下度御頼申上候宿元之儀ハ
萬端よろしく御頼申上候段々調候一品且追便より寄替米等下シ置候
間賣拂方等可然御下知被下度は亦奉願候

【解説】中將様益御機嫌克云々トハ前日久光公カ諸侯ト長州處
分ノコトヲ議セントシ兵七百餘名ヲ率ヒ入京セルコトヲ云フ
叔母トアルハ皆吉鳳德(母ノ父)ノ四女ニシテ助市ノ妻ナリ高取

入云々ハ當時薩藩ニ於テハ自己ノ持高ヲ賣買スルコトヲ得タ
ルカ會小番新番等家格ノ持高ノ員數ヲ規定セシヲ以テ高ヲ賣
却スルモノアリ依リテ利通ハ之レヲ購入セントシタルナリ

一六七八 小松帶刀への書翰 慶應三年八月廿三日

(内山元一氏藏)

【按】久光公ニ隨從シテ滯坂中ナリシ小松ニ京都ヨリ答書シタ
ルモノナリ

尙々谷村雲啓歸國內願之一條西郷へ談置同人ハ御談合可申上候付宜
舖奉願候早速御裏御變革被仰出候ハ、何も子細無之事と奉存候へ共
御國元ニあるハ御引取と申事ニあるハ谷村交代も御差止メ相成たる由ニ
御坐候同人も内情有之向ニ相見得無故滯居候義も迷惑之譯ニ可有御
坐候付何分よろしく御吟味可被成候

兩度ニ尊翰相達難有拜見仕候

中將公日々御快方ニ益御機嫌克被遊御坐奉恐悅候柴山一條ハ委曲西郷
方御直談申上候賦ニ御坐候爰元其后何も相變候義も無御坐候昨日
二條中川宮へ大樹參殿有之何も事柄分兼申候其地も別段相變候事も無御
坐筈翔鳳丸も昨日去出帆之都合ニ相成申候由能都合ニ三邦丸も大抵一
緒ニ着可仕候

先日藝へ參候節辻ニも御機嫌伺旁下坂之心組ニ候處尊公様御上京如何
ハ相尋候付取究候亦ハ難申上候得とも依模様亦ハ近々一應歸京可致との
趣ニ相答置申候其后何たる事も承不申候何れ西郷下坂之上御引取可相
成と奉待上候

別紙桂家伊地知書狀御返申上候洋行書生方書狀西郷方言上可申候委事同
人方御聞取可被下と御答奉申上度艸々如此御坐候拜具

八月廿三日

大久保一藏

帶 刀 様

侍史

別啓

別紙桂家方之御書面拜見仕候處モンブラン御斷一條ニ就亦ハ別御心
配相成若六ヶ鋪向ニ相成候ハ、誰か御差下相成候様との趣相見得申候
付若其時宜ニ相成候ハ、西郷御差下共相成候亦ハ現實爰元之儀相濟不
申候付不肖私へ被仰付候様奉願置候此一條も逆も一通リニ亦ハ相濟不
申第一御國體ニ相拘リ候大事件ニ結局之處專要之義と奉存候付其時
宜ニ及候ハ、何れ誰れか差遣不申候亦ハ相濟申ましく候付前以御願申
上置候付左様御舍居被下候様分奉願候百拜

八月廿三日

大久保一藏

帶 刀 様

【解説】中將公云々トハ當時久光公脚氣ヲ患へ歸藩セントシ大
坂ニ於テ療養中ナリシナリ桂家ハ家老桂右衛門伊地知ハ壯之

丞「洋行書生」の書狀云々トハ英國留學中ノ吉田清成・鮫島尙信・森有禮・松村淳藏・畠山義成ノ五人カ七月十日附ヲ以テ「モン・ブラン」ノ人ト爲リヲ指摘シ同人ヲ商社事業ニ採用スルコトノ不可ナル旨ヲ利通及ヒ伊集院左中ニ進言セシ書翰ヲ云フ又別啓桂ノ書翰ニ見ユル「モン・ブラン」御斷一條云々ハ恰モ渡佛中ナリシ岩下方平等ト同行シテ「モン・ブラン」來朝ノ報アリ然ルニ薩藩ニ於テハ王政復古ノ機運漸ク熟シ出兵準備等ニテ多端ヲ極メタル際ナレハ商社事業ニ關スル契約ヲ履行スルコトノ如キ困難ナル立場ニアリ且ツ前掲留學生ヨリノ勸告アリシヲ以テ人ヲ上海ニ派シ契約ヲ破談セシメントシタルモノニテ利通ハ若シ之レカ處理ニ付キ困難ヲ生スルトキハ西郷ハ當時京都ヲ離ル、能ハサル事情ニアリシカ故ニ自ラ歸藩シテ之レニ當ランコトヲ豫メ通告シタルモノナリ

一六七九 船越洋之助への書翰 慶應三年九月十一日

(岩倉家文書)

【按】土州藩蒸氣船借用ノコトニ付キ述ヘタルモノナリ

尙御安祥被成御坐奉拜賀候昨日亥御尋被下候へとも乍毎失敬之至ニ存候扱御談申上置候土州蒸艦之儀承合候處壹艘來居候向ニ御坐候貴様御方より御糺相成申候哉一艘ニ亦去迎も借用相調申ましくかと和考申候此段一先以書中奉得貴意候拜首

九月十一日

大久保一藏

船越洋之助様

要詞

【解説】船越ハ藝藩士衛當時軍兵輸送ノ爲メ土州藩ヨリ汽船ヲ借用スヘク之レカ交渉ヲ船越ヨリ依頼サレタルモノニテ利通ハ是月十五日久光公歸藩ニヨリ豊瑞丸ニ同船シ王政復古決舉

ニ付キ出兵準備ヲ協議センカ爲メニ山口ニ出發セリ

一六八〇 西郷隆盛への書翰 慶應三年十二月二日

(石光新吉氏藏)

【按】山内容堂ノ上京ニ付キ土州藩ト交渉ノコトヲ報シタルモノナリ

御示談之通岩公ハ申上後藤ハ引合只今罷歸申候然處小夫共引取後大坂より着船之旨一左右相達候由何分此節柄人数十分不繰出候ハ不相濟と論ニ一運漕ハ人数而已乗込取返し直ニ容堂公御乗舟と申運之處航海中風濤ニ逢死人迄有之候由乍然御上京之儀ハ萬々無相違旨相達申候次第ニ今晩直様福岡下坂いたし明日早々ニ開帆直ニ御乗船ニ御上京之御運ニ此上ハ間違無之候依テ船借用之儀ハ右次第故夫ニ不及と相考候得共若器械等相損候ハ航海難出來候節ハ御拜借奉願度趣明早天參上旁御願談申上度含ニ候處不圖小生參リ候付形行御漸申上候尙明日ハ參上之上御禮

可申上と之事ニ御坐候此段以參申上等候得共御免を蒙紙上ニ早々頓首

十二月二日夜

本文尙亦懇願も承候へ共いつれ明日拜上可申上候○大坂之方ハ別段先懸念ニ及申ましく存申候

西郷吉之助様

大久保一藏

【解説】前日利通ハ西郷及ヒ長藩士ト會シ大號令煥發ヲ八日ト決セリ會々後藤象二郎ト會シテ容堂侯未タ藩地ヲ出發セサル旨ヲ知ルニ及ヒ利通ハ便宜上薩藩ノ汽船ヲ使用セラルヘキ旨ヲ述フルアリキ尋イテ高知ヨリノ汽船大坂ニ着シ容堂公ノ上京確實ナル旨ヲ報シ來レルヲ以テ汽船借用ノ要ナカルヘキコトヲ告ケタルナリ

一六八一 西郷隆盛への書翰 明治元年四月廿三日

(牧野家藏)

【按】大坂ヨリ還幸ノコト及ヒ徳川家相續問題ニ對スル朝議内情ノ近況ヲ報シ猶ホ堀内藏頭自及ニ關シ江戸ノ西郷ニ問合セタルモノナリ

別啓之得能ク委曲其元情實承彼是御盡力を以先々要領二三事件無滯御運相成御同慶奉存候就テハ種々不容易御配慮之程奉親察候軍艦之事ヲ決テ以奸策脱走之譯ニハ有之間舖候間自然御運も相付候事与奉存候折角御左右奉待候扱別紙
還幸之一條ハ大ニ所以も有之畢竟太政官も被召移朝廷上舊政御一新之處第一御着目之事候處急ニ相運兼候次第も有之殊ニ夏向相成候得之當分行在所之處中々
御栖居被爲調兼候間今般之御左右を以一先
還幸相成早々坂地
行在所太政官假之御造立御取懸り被爲在御運可相成と之御内定ニ御坐候

然處一應其許に往復之上あらてハ不可然与之論其起ル處ハ慶喜恭順ハ虚にして水戸退隱之節も二千人位も引列下り候の又ハ軍艦ヲ以奥羽之官軍を討の攝海へ差廻し候のと色々異説を唱へ候より御決着付兼候内情ニ御坐候是ハ軍艦脱走之説を以表面ヲ疑惑するの説と被察申候私共愚考ニ之最早要領の事々相運候間

還幸相成早々跡御運之相付候處肝要ニ断然御促ニ可然相考申候得共於行在所御懸合之上於其元平定之御見据相立更ニ御奏聞之上ト申論ニ相決候事ニ御坐候仍テ其邊可然御洞察御答相成候様御取計被下度相願候畢竟太政官被召移候事機會相失シ今日ニ至リ候間此上ハ

還幸相成候亦断然浪華
還幸御運相付候御内評之事ニ御坐候次第之紙面ニ難盡候間何分も御勘考可被成下候

一徳川相續之儀之徳川龜之助に被仰付可然与之論も有之候得共一説ニ

右被 仰付候得去大久保勝ちとハ則退ケらる候譯ニ可立到と之譯も有之實ニ不容易事件ニ事事實も難相分就る慶喜ニ血統近キものを被立候方可然カ又同人ニ可然カ情實ニ寄可然人體御見込も有之候ハ、早々御申越相成候様岩卿御沙汰承知仕候御勘考可被下候

一堀内藏頭恭順を立割腹いさく始末事實分兼候付御糺之上御申越可被下候家督も願出有之候付右通之次第ニ候ハ、早々被 仰付忠義を御旌揚相成度候得共説のミ相聞候事ニ若し相違有之候も不相濟候間爲念懸合候様承知仕候付是又相願候右早々如此御坐候拜首

四月二十三日

大久保一藏

西郷吉之助様

【解説】得能ハ良介ニテ關東出陣中ノ諸隊慰問ノ使命ヲ果シト九日歸京ス要領二三事件トアルハ江戸城收受等ニ關スルコト軍艦之事トアルハ舊幕府海軍副總裁榎本武揚カ十一日夜艦船

七隻ヲ率キテ房州館山ニ退去シタルヲ云フ「還幸ニ一條云々トハ當時聖上ニハ大坂ニ行幸アラセラレタルモ太政官ハ依然京都ニ存シ政務ノ澀滞ヲ來セシヲ以テ利通ハ大ニ之レヲ遺憾トシ一應京都へ還幸アラセラレ然ル後假太政官ノ造營ニ着手スヘキコトヲ主張セルニテ偶舊幕軍艦脱走ノ報アリシカ故ニ還幸ノ儀モ一應江戸ノ事情ヲ問合セタル上ニテ決定ノコト、ナリコレ等ノ事情ヲ報シ参考ニ供シタルナリ堀内藏頭名ハ直虎信州須坂藩主ニテ正月十七日江戸城中ニ自及シタルモノニシテ朝廷ニ於テハ藩士ノ上申ニヨリ之レヲ旌揚スルノ議アリ依リテ事實ノ調査ヲ依頼シタルモノナリ

一六八二 鴻雪爪への書翰 明治元年五月十一日

(大久保家藏)

【按】願書提出ノ問合セニ對シ答書シタルモノナリ

來翰拜見如示諭霖雨不堪鬱然候へ共尙御安祥奉拜賀候扱再願之御事御差出相成候亦何も御差支之儀無御坐相當之御沙汰可有之候間御出シ被成可然候此段御答迄早々來客中亂筆御免可被下候拜首

五月十一日

甲 東拜

雪 爪 老 師

拜復

一六八三 得能良介への書翰 明治元年六月三日

(大久保家藏)

【按】代官名稱ニ付キ答書シタルモノナリ

拜見別紙何も異存無御坐候御代官ハ知府事知縣事之名目ニ相成居候付御取調可被下候爲御心得此段申上候以上

六月三日

一 藏

良 介 様

御答

一六八四 覺 書 明治元年

(大久保家藏)

【按】公卿及ヒ長藩士江戸出張ニ付キ手當向キラ記シタルモノ

ナリ

覺書

一 公卿兩人判事等被差下候付會計ニ亦手當之事

海陸可有差別事

一 正親町長藩高橋熊太郎木梨精一郎二人就歸東手當

片岡源馬六十兩此内御内議ヨリ御取替

一 船之事

一六八五 岩倉公への書翰 明治二年六月九日

(櫻原新輔氏藏)

【按】海江田信義ノ書翰ヲ廻送セラレタルニ對シ答ヘタルモノナリ

一 御書奉謹讀候然ハ海江田書狀御差廻被下細々高諭之趣委曲奉畏候此段御請奉申上候謹白

六月九日

大久保一藏

岩倉卿閣下

尙々昨日新井私方へも參候由ニ御坐候海江田紙面も相達別段相替候事件無御坐候間差出不申候

一六八六 新納嘉藤一への書翰 明治二年十月八日 (大久保家藏)

【按】京都ニアリシ新納へ註文品ヲ依頼シタルモノナリ

一女鼻紙入 一

びろふど稿

一 胴ノ金物銀

薬入添

女十七八持用

右々御面働至極奉存候へ共鳥羽屋へ御調文被下度私去夏下東之節取入候ニ付同様之品ハ御沙汰被成下候へハ即相分リ可申候定亦出來合可有之存候付書出シ御添可成早便よと御のちを被下候へハ大幸奉存候已上

十月八日

一藏

嘉藤二様

一六八七 徳大寺實則への書翰 明治二年八月廿四日 (武内彌總次氏藏)

【按】北地問題并ニ開拓使長官任命ノ件ニ付キ答書シタルモノ

ナリ

尙々東久公ハ岩公御出向被爲在御手厚御説得被爲在候ハ、御異存

有之ましくと奉存候御情實ハいかゞ不奉伺候へ共必死之御盡力被爲
在度迎もい多不申候ハ、長官あらハ御請ト申都合あらハ尙御評議次
第二可有之奉存候

尊翰奉拜見候今日不參御多務之中奉恐縮候條公御廻狀之御趣意何も異存
無御坐候外ニ岩納言公御書中之趣御尤ニ奉存候何分北地之御運ハ片時も
早目無之候てハ人心も倦果瓦解ニ及候外有御坐ましく候間是非當月中を
期し揚帆之都合ヨ相成度就る東久公之處ハ函館御交際上を專務ヨして矢
張次官之方御宜舖候半与奉存候清水谷卿ハ當分御當地ハ長官も何も無御
坐候間暫時御留置跡之送り出し等任せらる候方可然歟与愚考仕候左候
島等之處ハ是非石狩迄出張候様可被仰付左候得之函館之混雜も無之可然
歟与奉存候吳々斷然御達相成候様奉願候此段拜酬如此御坐候敬白

八月廿四日

大久保參議

徳大寺納言公

【解説】曩キニ鍋島直正ハ開拓長官ヲ免セラレシニ後任トシテ
推薦セラレシ東久世通禧亦就任ヲ躊躇ス依リテ利通ハ之レヲ
遺憾トシ樺太問題ノ交渉ハ最モ至急ヲ要スルコトナルヲ以テ
速ニ決行アランコトヲ進言シタルモノニテ越ヘテ翌廿五日東
久世長官ノ任命アリ書中ノ島ハ開拓判官義勇ニテ「石狩迄出張」
トハ札幌ニ府ヲ設ケントセシナリ

一六八八 伊集院直右衛門への書翰 明治二年十月十四日 (下村重麿氏藏)

【接】大泉藩士某面會ノコトニ付キ答書シタルモノナリ
朶雲拜誦然々此節大泉藩西國遊歴ニ付彼藩人小子へ面會之事承知仕候何
も差支之儀無御坐候間入來有之候様御傳被下度乍去自然差支候折ハ無遠
慮相斷可申候付其段ハ御申入置可被下候御請のミ早々頓首

十月十四日

大久保拜

伊集院直右衛門様

貴答

【解説】大泉藩ハ舊庄内藩戊辰ノ役ニ降服ノ際西郷等ノ意見ニ依リ寛大ノ處分ヲ受ケタルヲ以テ藩士其ノ徳義ニ感シ藩主ノ子弟ヲ始メトシ鹿兒島ニ遊歴スルモノ多シ本書ノ面會者ハ不明ナルモ利通ニ紹介ヲ求メタルモノナランカ

一六八九 藤井助市・石原直右衛門等への書翰

明治二年十二月廿八日

(大武丈 夫氏藏)

【按】祿高并邸宅買入ニ付キ郷里親戚へ依頼シタルモノナリ

尙々直二郎殿其外皆々様元氣ニ御坐候直二郎とのハ伏見へ被差越候間書狀を遣シ無キ歎も難圖御懸念被下ましく候也

追啓申上候尙又正右衛門様御手紙拜見仕候處重久氏賣高も有之候由右々町田方金子御振向相求置方可然与勘考仕候追々之處段々賣高も可有之候

得共相見合候内りならず跡戻り候ものニ十分之事ハ出来候ものニ無之候決斷して右様之高有之候節夫則入手候方別々安心仕候事ニ御坐候付何卒被仰談無御猶豫御求置被下候様御願候且亦屋敷一條正右衛門様御奔走被下候由別々御心配懸上申候水上山内本屋敷随分よろしく候由遠近之處ハ格別遠方ハよろしく無御坐候見せらし等ハよろしき處ニ候得ハ其上無御坐候只今之處ニ十分之場所ハ有之ましくまると吉利家屋敷位之處ニ候得夫別々可然与勘考仕候山内本屋敷もの位ニ有之候得夫何卒御取入置度ものニ御坐候以御勘考御決斷奉願候もし右邊ニ無之候得夫外ニ御さりし可被下候此段御願申上置候以上

十二月廿八日

大久保一藏

助市様

直右衛門様

正右衛門様

一六九〇 松方正義への書翰

明治三年三月二日

(松方巖氏藏)

【按】歸藩前後ノ事情ヲ報スルト共ニ山口縣暴徒連累者ノ探索方ヲ依頼シ猶ホ五岳へノ揮毫ヲ依頼シタルモノナリ

追日春暖相成愈以御安康被成御奉職奉敬賀候小子碌々罷在漸々御國元相發當所ハ先日ハ滞在今日解纜仕候間乍憚御放慮可被下候此内ハ御投書儘ニ相達難有拜見是非當所マテ拜接可仕与相考居候處山口ハ立寄彼是延日相成不得止直乘ハシ候御國元ニおひて何も相變候義も無御坐候二九公も兎角長御煩ニ速ニ御出立中々六の舖先差向之處御猶豫之御願ニ相成候長州も意外之次第マテ大ニ目的も相違仕候乍去速ニ鎮定致無此上都合ニ御坐候此上ハ跡折合之處第一之事与懸念致し候從東京德大寺公吉井土方等山口ハ被差向候由當所ニ承申候今頃ハ着相成候半与相察候御縣よりも精々御探索被下相分候義ハ爲御知被下度御願申上候段々浮浪輩等へ

氣脈相通居候与之風説も有之候へ共縦令有よもせよ格別之事ハ無之与相考候鶴崎川上玄齋一列之處益評判承候頃日御探索之趣ニ寄安心之致居候得共尙又御手筋有之候ハ、愈慥成情實丈之御探置可被下候兎角 皇國之事も當年中ニ何をよも相定可申与相考候爾來東京之御模様如何之御事候や情實相分兼候へ共御案通軍局民部大藏之處迎も只今^(欠) ハ大基本相据候見留更ニ相付不申甚以大難事与相考候政ハ只民心を得る^(欠)与得ざる^(欠)とニ可有之候處今日之有様マテハ實ハ舊幕之暴ヲ慕ひ候人心ニ而長大息之至ニ御坐候從坂地段々愚存も申上置候得共一體御案内通之次第マテ改るよも又一大難事ニ候間何れ一機會ヲ得不申候^(欠)此弊を一掃ハシ候事ハ六の舖相考候況乎今日ニ相成候^(欠)困却之外無之候軍局も即今之姿マテハ振興之目的無御坐候扱々世の中ハ六の舖ものマテ此節ニ至りよふよふ悟道仕候位御笑察可被下候段々申上度事も有之候へ共書中態与簡略仕候

一一帖差上候間五岳老は何卒染筆御頼被下度く願候些煩しく可有之候へ共當分ハ是をたのしみ致居候間分御頼被下候様願上候尤書讀あきて面白無御坐候相調候ハ、其元よと幸便有之候ハ、直ニ御送被下度若無之候ハ、當所の御差出可被下候高榮馮銃如与申支那之畫人昨日席畫相企一見仕候誠よ面白兎角日本人与ハ相替て風骨之感も有之候

右乍延引回復且御願旁呈寸楮候解纜ニ臨踈略御免可被下候折角爲國家御盡力被下度御縣之處も名よ叶候様當年一盃位ニハ御成功有之度所仰候一縣より隣縣ニ推及し終ニ天下ニ模範さらく免度御事ニ拜願候早々敬白

三月二日

甲 東拜

松方君閣下

侍史

尙々五岳老染筆吳々よろしく御願申上候可成早目相調候得ハ仕合何

を東京よと一禮ニ及候様可仕候

【解説】本書ハ利通カ鹿兒島ヨリ歸京ノ途長崎ニ滞留セル際日田縣知事タリシ松方ニ發シタルモノナリ書中ノ「從東京云々ハ山口ノ脱隊騷擾鎮撫ノ爲メ二月十二日大納言徳大寺實則カ宣撫使ニ任セラレ中辨土方久元彈正少弼吉井友實等ト共ニ山口ニ派遣セラレタルヲ云フ川上玄齋ハ肥後藩士ニシテ高田源兵衛トモ稱シ當時政府ニ異心アリシモノ又五岳ハ有名ナル僧儒ナルト共ニ畫家ヲ以テ聞エ古竹ト號シ詩書畫三絶ノ稱アリ

一六九一 得能良介への書翰 明治三年四月廿日

(大久保家藏)

【按】來邸ヲ乞ヒタルモノナリ

今朝ハ御尋被下忝奉存候扱明日御差支無御坐候ハ、十二時ヨリ御入來被下度若御繰合六ヶ舖候ハ、三時頃ヨリ高輪之方へ御入來被下候様御願申

上候此旨艸々奉得御意候拜白

四月廿日

利通

得能様

猶何分御返詞可被下候

一六九二 参議への書翰 明治三年四月廿八日

【按】遅参ノコト及ヒ早川勇不参ニ付キ廣澤副島佐々木ノ諸参議ニ依頼スルトコロアリシモノナリ

御揃御每勤奉敬賀候然は今日兵部省へ御用有之出仕可仕ニ付遅参に及候間宜舖御頼申上候熊本藩事件今日は早川参朝の趣相達置候處今朝米田大参事参候て早川事齒痛にて難澀今日は迎も参朝難仕明日は推て罷出候様仕度候に付今日の處は宜舖御断申上吳候様承申候所勞に付ては不得止候に付昨日佐々木君より宍戸へ御通相成候と存候早々形行御達被下候様御

願申上候右府公へ別段不申上候に付宜舖御願申上候此旨早々頓首

四月廿八日

利通

参議御中

一六九三 吉井友實への書翰 明治三年七月十四日 (天久保家藏)

【按】來邸ヲ求メタルモノナリ

今日去此方御入來被成ましくや岩下氏にも申遣置候此段早々頓首

七月十四日

大久保

吉井様

一六九四 佐々木高行への書翰 明治三年七月廿九日 (佐々木侯爵家藏)

【按】伊地知正治面會ニ付キ居所ヲ尋ネタルモノナリ

拜讀伊地知へハ懸合不致今日出仕の上引合の含ニ候處會議所見分にて出

務無之由就ては場所分居候ハ、則一封を飛し可申乍去若行違にては甚面倒にも相成申候間寧ろ明日にも延し可申歟此分一應御答申上候艸々頓首

七月廿九日

大久保

佐々木様

一六九五 岩倉公への書翰

明治三年八月廿五日

(樺原新輔氏藏)

【按】曩キニ提出セシ意見書ノ回答ト所勞見舞ノコトヲ謝シタルモノナリ

一御書奉謹讀候益御機嫌能為遊御坐奉大慶候然ハ先日來次第不同愚存之趣言上候處態々尊答被成下奉畏候將又小臣就所勞伊藤可相願旨御懇諭難有此内ハ佐藤相頼候て最早余程宜舖今兩日中ニハ參朝も可仕ニ付何卒御安心可被成下候其上參殿彼是相伺候様可仕拜答而已早々如此御坐候謹言

八月廿五日

利通

岩亞相公

一六九六 松方正義への書翰

明治三年閏十月廿九日

(松方巖氏藏)

【按】最上五郎海外留學ノコト民部省ヨリ上申方然ルヘキ旨ヲ

通知シ猶ホ長谷部ノ進退ニ及ヒタルモノナリ

尙々長谷部大坂ハ被轉候旨申上置候へ共一旦御治定相成居御檢印迄も相成候處其後御見合与申事之由昨日同人被仰付候方宜舖与申候へ共廣澤論ニ同人御請致ましく与貴兄御咄之旨申出を並よてハ無致方与其マ、捨置候何ぞ同人咄よても御聞込候やハ、与存候

彌御清安奉敬賀候然ハ過日御咄申上置候最上外國勤學之事今日萬里小路石山兩華族洋行被仰付筈ニ内定致候付明後日御發足可有之候直ニ御申立有之候ハ、御評議相付可申候大木御示談省々御願立ニ運ニ相成候方可

然尤農政ハ一大緊要事何ヲ扱置御差出無之候亦不相濟候尤追々人物取調御願立之旨をも御申出相成候亦も宜舖御坐候委曲拜謁可申上候得共其内早々如此候也

壬 廿九日

大 久 保

松方盟臺閣下

【解説】最上五郎ハ鹿兒島藩士米國ニ留學シ後農商務省少書記官タリ萬里小路ハ通房石山ハ基正大木ハ民部大輔喬任ニシテ松方ハ是月三日日田縣知事ヨリ民部大丞ニ轉任セルナリ書中利通カ農政ニ重キヲ置キ且ツ青年有爲ノ士ヲ海外ニ留學セシメ人材養成ニ留意シタルヲ見ルヘシ

一六九七 岩倉公への書翰 明治三年十二月十五日

(森下博氏藏)

【按】公ヨリ來訪ヲ通セラレタルニ對シ答ヘタルモノナリ

芳墨奉敬讀候然去明朝九時半カ十時迄之間御入來可被下趣奉畏候何も差支無御坐候間奉待候此段御請申上候拜首

十二月十五日

利 通

岩倉公閣下

一六九八 吉井友實への書翰 明治四年二月三十日

(大久保家藏)

【按】吉井ヨリ圍碁來會ヲ誘ヒタルニ對シ答ヘタルモノナリ拜見今日去無據約束有之四字頃より參上可仕候若晦日之御間違共ニ亦去無之哉明日かれハ木場ニ參候亦可然此旨早々頓首

二月三十日

大 久 保

吉 井 様

御 答

一六九九 山縣有朋への書翰 明治四年三月十三日

(山縣公爵家藏)

【按】愛宕通旭等逮捕ニ付キ參朝ヲ促シタルモノナリ

尙々大丞ニ亦も參朝可相成候得共何れ先生御參無之ハ決着致兼候
半与存候付態々申上候

彌御安康奉敬賀候然ハ草莽徒云々ニ義ニ付至急御着手不相成候ハ難差
置事件到來仕候付過刻兵部省へ御用召相成候得共承候得ハ御所勞ニ御
引入之様も承候付爲念申上候自然御所勞ニ候得ハ甚御無理与奉存候
へ共御勉強被爲出來候ハ、暫時也共御參朝相成候様いさゞ度此旨早々如
此御坐候頓首

三月十三日

大久保

山縣君

【解説】當時日田縣ノ騷擾久留米藩士ノ陰謀ヲ機會ニ舊公卿愛
宕通旭外山光輔等亦政府顛覆ヲ企テ政體ヲ一變センコトヲ謀

ル會々政府未發ニ之レヲ偵知シ是月十二日愈逮捕ノコトヲ決
セシヲ以テ翌日山縣兵部少輔ニ參朝ヲ促シ之レヲ議セントシ
タルナリ(文書第四所載四年三月十四日附岩倉公宛書翰參照)

一七〇〇 山縣有朋への書翰 明治四年三月廿四日

(山縣公爵家藏)

【按】不軌ノ徒逮捕ニ關スルコトヲ報シタルモノナリ

御投書拜閱昨日之御所勞中甚御苦勞奉懸御氣之毒奉存候然ハ昨日之彼是
手後れ相成候ハ獲物無之尤心當之方ハ一會も無之由ハ御坐候仍昨夜
より今朝ニ懸け府廳ハ出席種々示談明朝迄ハ是非斷然入手之手筈致置
候尤今日手段を以彼等之一會を爲催候ハ突然相襲候筋若其儀不調ハ大概
居所も相分居候付一時ニ手を配テ必死々々捕可申もはや今夜中を過候
ハ相濟不申候付くれ、不誤時機様過刻も以書中懸合いたし置申候付
必吉報を得候半与相待居申候是又右様御着手相成候得ハ關係も大に相成

殊に西京に於て二十餘名召捕候事件相聞よほと此方におひて切迫致候事情も有之是非一擧に着手不致候ハ不相成時宜故過日來官員云々之處も今日相運秋田にも十名計呼出し相懸ケ申候右邊ハ御論も有之少々輕擧之様候得共今日はおひてハ不得止譯に成立御斷決相成候付左様御承知可被下候少々ハ動き候歟も相知不申府廳にも昨夜段々示談よほと憤發是に至候ハ右出陣之心持よて盡力勉勵する与之事に御坐候猶御面談委曲可申上候得共回復旁々早々如此御坐候頓首

三月廿四日

大久保

山縣様

【解説】愛宕等ノ一黨逮捕ニ付テハ東京府廳ト打合セ秘密ニ準備ヲ整ヘ計略ヲ以テ彼等ヲ會合セシメ一網打盡ニ檢擧セントシタルナリ文中「西京云々秋田トアル如ク彼等ハ各地ニ於テ呼應決擧セントセシモノニテ秋田藩士ハ初岡敬治等ノ陰謀ナリ

一七〇一 山縣有朋への書翰

明治四年三月廿六日

(山縣公爵家藏)

【按】井上馨ト共ニ自邸ニ於テ會合ノ時日ヲ答ヘタルモノナリ芳楮拜誦猶御多祥奉敬賀候然き過日御咄申承候井上君御一會之儀廿七八兩日之内与被示聞承知仕候廿八日夕四字より御來賁被成下候得ハ大幸奉存候此段拜復而已如此御坐候早々謹言

三月廿六日

大久保拜

山縣盟臺下

拜復

【解説】井上君トハ大藏少輔井上馨ニシテ山口藩知事及ヒ木戸孝允等ノ東上ヲ促サンカ爲メニ會合セントセシモノニテ日記廿八日ノ條ニ「四字ハ井上山縣兩子入來種々示談承る且井上歸藩相談有之承候トアリ井上ハ翌四月二日東京ヲ發セリ

一七〇二 山縣有朋への書翰 明治四年四月廿一日

(山縣公爵家藏)

【按】鎮臺設置ニ付キ布告案ヲ送り意見ヲ求メタルモノナリ

御多祥奉敬賀候然キ鎮臺一條別紙御布告案差上候間猶御氣付も被爲在候ハ、無御遠慮可被示聞候且又鎮臺場所之儀先別紙之通ニ可然や是又御勘考可被下候此段早々頓首

四月廿一日

大久保

山縣君

尙々御存寄無之候ハ、明日ハ御發表之運ニ可仕候御留置相成候も後刻迄ニ御返被下候様御願候也

又御布告案ハ簡略之方可然歟と存候別紙之通相成候へ共若御趣意ニ觸候儀も可有之歟十分御添削可被下候

【解説】布告案ハ逸ス當時新政ヲ悦ハサルモノ各地ニ蜂起シ動

モスレハ不穩ノ形勢ニアルヲ以テ鎮臺設置ノ議起リ乃チ東北ハ本營ヲ石巻ニ分營ヲ福島盛岡ニ九州ハ本營ヲ小倉ニ分營ヲ博多日田ニ設置スルニ至レルナリ(文書第四所載四年四月廿四日附岩倉公宛書翰参照)

(大久保家藏)

【参考】山縣有朋より大久保への書翰 明治四年四月廿一日

御奉職奉欣然候扱鎮臺御布令書聊氣付候儘字句ヲセ、リ申候御勘考被下度書餘拜鳳ト不一

大久保老賢臺

山縣拜

一七〇三 山縣有朋への書翰 明治四年四月廿四日

(山縣公爵家藏)

【按】鎮臺設置布告ヲ報シ且ツ鹿兒島藩兵ヲ日田ニ出張セシムル件ニ及ヒタルモノナリ

御多祥被成御奉務奉拜賀候昨日御談申上候通佐賀熊本兩藩へ別紙之通今

日御沙汰相成候付左様御承知可被下候豊津柳川兩藩ハ先見合置候付宜キ折ニ爲御知被下度鹿兵二小隊ハ長崎へ御留置相成候付是ハ以御都合日田の出張候様御省々御達ニ可然歟与奉存候西郷ハ申談候處二小隊ハ日田の出張之事何も差支無之与申事ニ御坐候陸奥官員人物之儀も談置候尙小西郷ハ申上候様可仕候何れ拜晤ニ讓候頓首

大久保利通

四月廿四日

兵部省
少輔 山縣殿

至急

【解説】廿三日設置セラレタル西海鎮臺ノ分營タル博多ニハ佐賀熊本二藩ヨリ各一大隊宛ヲ又日田ニハ鹿兒島藩ヨリ二小隊ヲ派遣セシメタルヲ云フ

一七〇四 門脇少造への書翰

明治四年六月廿六日

(鳥取門脇家藏)

【按】來訪ノ延期ヲ請ヒタルニ對シ答ヘタルモノナリ

朶雲拜誦愈以御安康被成御坐候由敬賀候然ハ今日御入來之義就御用朔日ニ御延引之旨委曲敬承仕候態々被爲入御念候御事ニ御坐候此旨回復迄艸々頓首

六月廿六日

大久保

門脇老臺

御受

一七〇五 井上馨への書翰

明治四年八月廿四日

(大久保家藏)

【按】重要省務協議ノ爲メ病ヲ推シテ出省方ヲ申入レタルモノナリ

今朝ハ御紙面拜見兎角寸切与御快氣無之由折角御保養明日ハ是非御參省之處祈念仕候別冊東京府地稅取調并ニ府縣貫屬家祿云々ニ二冊御差廻申

候猶明日御直談可申上候其餘之件々ハ澁澤書面ニ御承知与相略候○證券發行澁澤取調之書正院ハ伺一紙相調今日差出候都合ニ運ひ候○山縣大輔當省ハ相見得彼定額之事是非取究不吳候ハ既ニ鎮臺出張之人員も差留置候譯よて甚困却イタシ候付明日ハ決定致吳与之事ニ候尙省中ニも彼是紛論不致一定候位ニ候へ共明日ハ閣下御出省可有之候付示談御答可申入与申置候是も面上可申上候得共大略申上置候

右早々如此候也

廿四日

尙々是非明日ハ御出不被下候ハ甚困入候黒田も出省昨日御談之次第ハい細承候○吉田横濱ハ一應出張ゆ度与之趣上野ハ承候是も明日御談可申上与存候

井上老臺

二册付

利通

【参考】山縣有朋より井上馨への書翰 明治四年十二月八日

再度之尊牘難有落掌此程ハ兎角御疎情ニ打過候御海容可被下候都下取締一條ハ西郷ハ及熟話置候猶今日も神速着手之儀談話致候扱證券御發行相成候處別紙苦情之儀供電覽候固よ融通之目的ハ相立候事与奉存候得共即今甚困却罷在候殊ニ遐邑邊陲よ到候ハ尤困難此事ニ候差向處是迄之紙幣貨幣之内を以御渡被下度奉企望候是亦御差繰御難澁与御察候得共余(欠)如何とも難仕御洞察被下度楮外不日拜晤草々頓首

十二月八日

山縣 朋

大藏 大輔様

親拆

二白河野ハ早速老西郷ハ談置申候

一七〇六 覺 書 明治四年

(大久保家藏)

【按】廢藩置縣後政府官員ノ人撰ニ關シ認メタルモノナリ

卿

大輔

外

岩

寺島

井上

伊集院

伊藤

西郷

後藤

山尾

佐々木

穴戸

安場

吉井

山縣

川村

副島

○參

文

兵

宮

司

工

大

外

○

○律法調掛

江東

○同

津田

○同

勝

○同

西

彦根谷

(外務方) (不明)書記官

田邊少丞

鹽田三郎

(民部方) (不明)書記官

福地源一郎

何禮之

柴田大記

小松濟治

川路簡堂

今野米田捺次郎

大藏省 田中戸籍頭

阿部潜

司法省 中野剛太郎

兵部省 山田市之丞
 文部省 田中國之助
 宮内省 村田新八
 工部省 肥田濱五郎
 外務省 野村治之助
 香川敬三

一七〇七 黒田清隆への書翰 明治六年六月八日

(黒田伯爵家蔵)

【按】西郷隆盛從道兄弟間ニ行違ヒノコトアリシヲ以テ從道ニ謝罪方ヲ忠告セシ旨ヲ報シタルモノナリ

尙々即今之處兩人共進退重大之關係且イカホトノ失徳ニ相成候も難
 圖候付是非他ニ關セスシテ今日之處ニ穩當ニ居合付不申候ハ相濟
 不申候間何卒宜ク御勘考可被下候當人直ニ參候も一應之盟兄よ
 老西郷の御咄有之候方よろしく可有之候

彌御安康御每勤奉敬賀候昨朝ハ御投翰拜讀西郷子一條當人の御忠告相成
 候趣い細承知仕候然處今朝同人入來候ハ尙亦是迄之形行も詳細ニ承候仍
 此上盟兄与御談申上吳候様且當人勘考之趣も承候得共小子所存ニハ如
 此行違ひ出來候上ハ他より辯解以々候も決而氷釋する譯ニ至兼候ハ
 必然ニ付老西郷の當人直々ニ參候ハ只赤誠を表し幾重ニモ謝罪して其疑
 團を解候外致方無之与存候其段ハ過夜吉井とも談合小西郷の忠告之含ニ
 罷在候處幸ニ盟兄の御咄有之今朝參候付前條之趣を相答置候次第ニ候
 此儘ニ引入との何与の申事ハ萬不可然假令氷釋すると否ニ不拘早々當
 人直ニ謝する様無之ハ體裁も相立申ましく候自ら賢考も可有之与存候
 得共乍卒爾以紙上一應愚考申上候間左様御承知可被下候御直談可申上候
 得共其間艸々如此御坐候也

六月八日

大久保利通

黒田盟臺閣下

【解説】文書第五所載六年六月八日西郷從道宛書翰參照

一七〇八 宮島誠一郎への書翰 明治六年八月二日 (宮島大八氏藏)

【按】面談ヲ求メタル來書ニ答ヘタルモノナリ

霖雨不堪鬱然候得共彌御安祥被成御坐奉拜賀候然々過日ハ御光來被爲下由ニ候處折柄外出中御殘多奉存候御書中之趣委曲承知仕明三日差支無御坐候間四字比ヨリ御來杖被成下度奉願候此段乍延引御報旁早々書外拜接讓 頓首

八月二日

大久保

宮島君

【解説】宮島ハ米澤藩士當時左院三等議官タリシカ左院ノ權限ヲ擴張シテ立法議政ノ府トナスヘキコトヲ論シタリシカ故ニ利通ノ歸朝スルヤ直チニ面會シ抱懷ヲ陳ヘントセシナリ宮島

ハ其ノ著國憲編纂起原ニ三日ノ會談内容ヲ記シテ曰ク「近況ヲ委細相談結局議政行政ヲ分ケテ三大權ヲ分チ以テ施政無之テハ御國體相立間敷旨相談ニ及候處大久保モ根元ヨリ話有之實ハ使節派出先へ御用有之ニ付早々歸朝之旨御呼戻申來夫ヨリ大使ニ先チ二三箇國ヲ殘シ不取敢歸朝候處已ニ御改革モ相濟ミ候由ニテ態々歸朝ニ對シタル御用モ無之當時休息中政府ニ御模様承知不致唯々處々方々或ハ徵兵ノ爲トカ或ハ徵租ノ爲トカ一揆蜂起是ハ如何ニモ原因ノ有之候事歟此等ハ此儘ニ御差置ニモ相成ルマシ但シ三大權施政云々之儀ハ政府獨リ了解スル所ニテ未タ地方官等ニ到テハ何等ノ理由カ不承知之人數多ナルヘシ此等ハ漸々施行未タ遲シト爲サス唯政府之令朝令暮改諸規則繁密ハ必ス人民ノ所不堪ナルヘシ不日參朝ノ上ハ篤ト勘考御評議ニ及フヘシ云々

【参考】宮島誠一郎より大久保への書翰 明治六年七月廿八日

前略陳去左院御創立以來兩度ノ改革アリト雖モ而シテ未タ立法ノ權ヲ有セス今ヤ閣下御歸朝ニ付宜シク今日ノ時勢ヲ熟察シテ至當ノ議院ヲ起シ立法行司法ノ三大權ヲ平均シテ以テ國法ヲ一定シ廢藩置縣ノ全局ヲ御結了有之度内務創立ノ議ハ別ニ具スル所アリ今茲ニ贅セス因テ昨年上申スル所ノ國憲論一篇御參考ノ爲メ呈上仕候委細御面晤ニ相讓度御歸朝之際御混雜奉察候得共御閑御示被下度奉伏願候也 頓首再拜

七月廿八日

宮島誠一郎

大久保老臺閣下

一七〇九 宮島誠一郎への書翰 明治六年九月五日 (宮島大八氏藏)

【按】來翰ニ答へ面會ノ期日ヲ報シタルモノナリ

彌御安康被成御坐奉拜賀候然去過日ハ御光臨被成下御殘置ノ御紙面拜見仕候明六日御差支無御坐候ハ、第四字ヨリ御入來被下度奉願候先日ヨリ種々多忙ニテ乍存御答延引大失敬御高量所仰候此段早々如此御坐候敬白

九月五日

大久保拜

宮島君閣下

【解説】宮島ハ其ノ著書ニ「六日午後ヨリ參リ内務新設ノ事ヲ論ス此事昨年同氏中途歸朝ノ折結約致候儀ニテ當時建白書ハ再度ノ洋行歸朝ノ日迄見合吳候様約束ニ付此段同氏ニ直様取扱相願同氏大憤發屹度擔當御評議ニ可及旨決答有之」ト記セリ

一七一〇 宮島誠一郎への書翰 明治六年十月十九日 (宮島大八氏藏)

【按】答書ノ延引ヲ謝シ面會ノ期日ヲ定メテ入來ヲ求メタルモノナリ

過日去御書翰被下則御回答可申上候處彼此取紛レ失敬仕候御免可被下候
扱御咄之儀有之御出可被下候ニ付閑日申上候旨承知仕候兩三日之間ハ差
支申候ニ付來ル二十三日朝第八時ヨリ御來駕被下候得ハ仕合ニ御坐候此
旨御答迄如此御坐候 頓首

十月十九日

利通

宮島様

【解説】時恰モ征韓論ノ閣議破裂後利通ハ辭表提出待命中ナリ
キ宮島ノ記スル所ニ依レハ廿三日大久保ニ到リ篤ト心事ヲ談
シ近來ノ政府上ノ御混雜實ニ案外ナリ内政未整ニ外征素ヨリ
不可爲御意見如何ト尋問セシニ大久保曰ク此節愚考中ニ付國
事之儀御答難申云々小官曰ク素ヨリ御答無之時ハ心事ヲ談ス
ル無用ニ屬セシナリ但シ小官ノ鄙見ハ如何御聞込ニ候哉ト詰
問ス大久保曰ク御意見ノ處ハ敬服感服ナリ此度ノ事件ハ三條

殿等ニ御責メ申ス事實ニ御無理ノ次第ニテ御發病ハ無餘儀事
ナリ過日御咄ノ伊地知進退之儀ハ委細右府ニ談シ置候ニ付不
日何トカ可有之旨申聞ナリ余初テ大久保參議ノ意底征韓ノ不
可ナルヲ察知シ内政ヲ整理スルノ益々急ナルヲ知ルト見ユ

一七一 岩倉公への書翰 明治六年十月廿八日

(大久保家藏)

【按】支那及ヒ北海道樺太ノ實地調査ノ爲メ陸海軍兩省官員ヲ
派遣スルコト及ヒ東北御巡幸樺太處分問題等ニ關スル意見ノ
内稿ヲ呈出シ加筆ヲ乞ヒタルモノナリ

別紙内稿相認メ差上候付御覽若シ御旨趣ニ觸レ候義有之候ハ、御加筆被
下度猶七字半ニ參上仕候得共其内御熟覽御勘考ニ爲差上置候此段艸々頓
首

十月廿八日

利通

具視公閣下

(別紙) 御心得書 内稿 (封皮表書)

別内定

一 即今支那及北海道樺太迄陸軍海軍兩省ヨリ實地検査ノ爲人撰ヲ以テ航海命セラルルノ條

二 來陽春時季ノ都合ヲ以

皇上北海道及奥羽ノ内

御巡行アラセラレ參議供奉ノ條

但北海道ハ要衝ノ地ナレハ海陸軍官員検査ノ上鎮臺ノ設等御治定アルヘシ

私樺太混雜裁判之事及經界談判之事何ク迄モ前議ノ御決定ニ戻ラサル様確定ナクンハ若シ曖昧ニ屬シ候節ハ其難今日ヨリ甚シキハ顯然タリ由テ今日ニ兩斷ノ決ナクンハアルヘカラサルナリ條理ヲ以テ論ス

レハ敢テ願ル所ナシトイヘモ前議ノ行懸リヲ以其情實ヲ汲ム時ハ一概ニ條理ヲ以情ヲ推スヘカラサルモノアリ信義不立時ハ何ヲカ成スヲ得ン

此條間違ヒアラハ舊參議ニ對シ御申譯アルマシ小臣ニ於テハ決シテ朝ニ立ツ事ヲ得ス

【解説】日露兩國人雜居ノコト端ヲ爲シ六年春樺太ニ於ケル露人暴行ノコトアリ征韓論紛糾スルヤ廟議ニ於テ朝鮮問題ヲ一時延期シ樺太處分ニ着手スヘキニ決シタルモ之レカ爲メナリキ即チ征韓問題ノ局ヲ結フヤ政府ノ方針トシテ先ツ實地調査ノ爲メ陸海軍人ヲ支那北海道樺太へ派遣シ又北海道へ御巡幸ヲ奏請スルト共ニ新タニ鎮臺ヲ設ケテ邊警ニ備ヘントセリ故ニ樺太經界問題ノ如キモ當時我ヨリ進ンテ使節ヲ特派シ直接露國政府ト折衝解決セントスルノ意見ナリシナリ舊參議ニ對シ

御申譯アルマシ小臣ニ於テハ決シテ朝ニ立ツ事ヲ得スト云ヘ
ルハ若シ露國ノ壓迫ニ躊躇シテ曖昧決セサルカ如キコトアラ
ハ利通カ征韓論ニ極力反對セシ責任上一日モ廟堂ニ安坐スル
コト能ハストナシ此際萬難ヲ排シ樺太處分ヲ斷行スヘキヲ意
味セルナリ

一七一二 覺

書 明治七年七月

(天久保家藏)

【按】三條岩倉兩公へ提議シタル手扣ナリ

- 一 小子支那行之事
- 一 大山岩之事
- 一 伊地知黒田之事
- 一 山縣之事

一七一三

伊藤博文への書翰

明治八年二月三日

(牧野家藏)

【按】來訪ヲ告ケシ書ニ答ヘタルモノナリ

尊楮拜讀爾後御安祥今日自神戸御歸坂之由奉拜賀候扱明日午前御入來可
被下旨奉畏候何も差支無御坐候付御待合可申上候此旨拜答而已早々拜首

二月三日

利通

博文様

【解説】當時利通ハ所謂大坂會議ニテ關西ニアリ日記四日ノ條

ニ「伊藤子入來木戸子板垣子ト談合ノ趣云々承ル小子異論ナキ

旨返詞イタシ候」トアルヲ參照スヘシ

一七一四

伊藤博文への書翰

明治八年二月八日

(牧野家藏)

【按】千早ヨリ歸坂ヲ報スルト共ニ明朝往訪ノ旨ヲ通知シタル

モノナリ

尙々明朝去九字ニ參上可仕候乍去若シ御急キ之御事候得去八字比參上仕候亦も宜ク御坐候何分御都合爲御知被下度奉願候

只今歸坂仕候處御投翰拜讀被示聞趣承知仕候扱早速御面會可被下木戸君も御滯坂之由甚以御氣之毒奉存候今晚ハ遅方相成候付何を明朝參堂仕可申候付御待被下度此旨御答迄早々何も拜顔御斷可申上候拜首

二月八日

甲 東

博文殿

【解説】翌九日伊藤ハ木戸ト共ニ利通ノ寓居ヲ訪ヒ板垣入閣ノコトヲ談シ利通亦之レニ同意スルアリキ(文書第六所載八年二月八日利通宛伊藤書翰參照)

一七一五 稅所篤への書翰 明治八年二月廿日

(武藤山治氏藏)

【按】猪肉ヲ贈ラレシニ對シ返禮シタルモノナリ

拜呈餘寒去兼候得共益御安固珍重々々小子瓦全天下之事御安心可被成候風味之を以猪肉之御禮ニハ御汗顔と存候得共二品致進上候間御恐縮可有之候先ハ任幸便艸々如此候也

二月二十日

利 通

稅 所 尊 兄

【解説】「天下之事御安心」云々トハ大坂會議ニ依リ木戸板垣トノ提携モ成立シ是ヨリ大ニ爲スアラントスルノ意ニテ末文猪肉ニ答禮シ例ニ依リ戯ムレ認メタルナリ

一七一六 稅所篤への書翰 明治八年三月四日

(大久保家藏)

【按】歸京後ニ於ケル動靜ヲ報スルト共ニ別邸家作建具類ノ送附ヲ謝シ猶ホ金策ノコトニ及ヒタルモノナリ

猶小子支那行中偶作重野へ評を乞候處添削相調流石大家ニ亦實感伏

仕候依る折角之事ニテ凡テ認替追々御送り可申上候付御引替被下度候跡ニ残す候得ハ笑を招き亦も凡情以やニ候付此段申上置候付先ッ表紙ナトナヒヤウニ御示し置可被下候松陰子へも其段御傳置可被下候楠公墓銘モ以るゝ与今更握掌仕候

二月廿一日之御投書慥ニ落手辱拜讀愈以御安固被成御坐爾後健康之爲御遊獵御勉強之由奉敬賀候小子ニハ積雪之爲妨らる漸々一度出懸候迄ニ候午去最早道路も宜ク相成候付精之合近々高輪住居可相調候付一兩日ツ、滞留職業相始候も晩菜之補而已からは經濟之目的依之相立可申實ニ一舉兩得生涯之策を得申候當方未何も相變候儀無御坐近々新聞可有之折角御待可被下候故ニ未格別之呵責も無之殊之外寛々ニお仕合之至ニ候一建物之事則御下知被下候由甚御面倒成候御禮申上候最早今日ニハ相達可申与樂相待居候風呂樽も御送り被下候由是又御禮申上候高輪家作カ過日申上候通出來上リ候處殊之外立派よて先ッ我連中別荘ニおハ第一等

与存候加之無上之飾り付以よ候も誇ニ足るへし与自負仕候兎も角速ニ御出京有之度候

一彼新田一條御取止之由承知仕候小子ニハ何をよても宜ク就るハ猶御相談申上候過日も申上候通若半金貴兄方よて御調金出來候ハ、半金も小子之借用ニ以よ度旨御相談ニ及候付多分何与る御發言被下候歟与奉存候前條通御取止ト申事ニ候ハ、何卒三千圓丈を從前之通改而借用之都合ニ參候得ハ別而仕合ニ付甚厚顔之至ニ候得共可然御考之上御相談被成下ましくや高輪家作も意外之入費ニ及其上本妻上京等前後見込よ外を候事多ク候付右御取止を幸よ猶又御相談申上候先キ之事を先キよて先ッ目前活路第一与存申候

一右御相談御調可被下候も早々御送り被下候得ハ難有奉存候左候而建物船運賃金襖紙其外拂殘之分を右之内方御辨置被下度此節差上度候得共甚手數相成申候付是又御頼申上候

右御回答御願迄早々猶追々可申上候時下御厭ひ御保護專要所祈候拜首

三月四日

利通

税所尊兄

追々兩三日ハ稍春光を帶別而暖ニ相成候最早格別之餘寒も有之まし
く吉井得能其外一同無異追々取會何も御安心可有之候

【解説】近々新聞可有之云々トハ三月八日木戸參議ニ任セラレ
尋イテ板垣モ亦入閣シ四月十四日ニ至リ政體變革ノ詔勅發セ
ラレシヲ云フ次ニ建物トハ建具ニシテ高輪別邸新築ノ爲メ税
所ニ依頼シテ大坂ニ注文セルモノ次段金策ノコト、共ニ文書
第六所載八年三月廿三日付税所宛書翰ヲ併セ見ルヘシ

一七一七 家祿奉還に關する建議書

明治八年三月卅日

(明治財政史)

家祿奉還ノ者へ本祿六ヶ年分一時下賜且土地山林等格別低價ヲ以テ御拂
下相成候儀ハ元來薄祿少給ノ者共就産力食ノ志有之候テモ素ヨリ不慣ノ
業ト云ヒ殊ニ資本金ニ乏シクシテ着手ニ途ナク空シク坐食困窮ニ陥リ候
者不尠ニ付是等ノ輩ヲシテ早ク土ニ着ケ各自營スル處有ラシメンカ爲メ
出格御至仁ノ御處置ニ有之候得ハ孰レモ此御趣意ヲ奉體シ各奮發力食ノ
基相立可申ハ勿論ノ儀ニ候得共萬一御趣意ヲ誤解致シ篤ト前途ノ見据へ
モ無之容易ニ着手却テ資本ヲ耗失スル者モ有之哉ト存シ昨七年一月及四
月兩度伺ヲ經テ夫々及諭達候次第モ有之各應ニ於テモ右ノ旨意ヲ奉シ精
々注意仕居候趣ニハ候得共是迄奉還致候者共多クハ困窮ニ至候趣相聞候
ニ付今般各地方現場ノ模様及取調候處別紙ノ通申出候中ニハ稍々恒産ノ
端緒ニ就キ候者モ相見へ候得共目前ノ浮利ニ迷ヒ一跌目的ヲ失シ忽チ窮
乏ニ陥ル者十ノ七八ニシテ東京府及北條縣ノ如キハ最其甚シキ者ニ有之
今日ノ景況ヲ以テ將來ヲ推考仕候得ハ到底就産安着ノ場合ニ可立至ハ萬

萬無覺束被相考候乍去家祿奉還ノ儀ハ當人ノ志願ニ任セラレ候儀ニ有之候得ハ縦令外面ノミヲ飾ルモノト雖モ區戸長連印願出候上ハ條理ニ於テ許可候外敢テ抑制ノ道モ有之間敷畢竟今日ノ姿ニテハ至仁ノ御趣意モ徹底仕兼可申ト深ク苦慮仕候依之猶又精細實地取調ノ上目的相立可伺出候ニ付家祿奉還願一應御見合相成度別紙御布告案相添此段上申仕候也
 追テ別紙府縣申牒未タ相揃不申候得共大抵大同小異ニ可有之ト存シ上申仕候余ハ差出次第取纏進達可仕此段申上置候也

明治八年三月三十日

内務卿大久保利通

【解説】封建制度ノ廢セラル、ヤ華士族ハ擅ニ農工商ニ從事スルコトヲ得タリシモ薄祿ノモノニ至リテハ往々資金ノ調達ニ苦シムモノアルヲ以テ曩キニ家祿賞典祿ヲ奉還セシメ資金ヲ下付スルノ制ヲ發布シタリ然レトモ時勢變遷ノ際空シク資金ヲ耗盡スルモノアリテ就産ノ目的ヲ達スル能ハサルモノ多キ

カ故ニ家祿奉還ヲ一時中止セシメ更ニ救濟ノ方法ヲ講セントシタルモノニテ遂ニ是年七月十四日奉還ヲ停止シ九年八月五日ニ至リ金祿公債證書ノ發行トナレルナリ

一七一八 松方正義への書翰 明治八年五月五日

(松方巖氏藏)

【按】用談アリテ來邸ヲ求メタルモノナリ

御面働之至ニ候得共遮而御内談申上度義有之候付御差支無御坐候ハ、御退出よと鳥渡御立寄被下候得ハ仕合ニ御坐候此旨艸々拜首

五月五日

利通

松方様

一七一九 税所篤への書翰 明治八年五月廿一日

(大久保家藏)

【按】地方官會議ニ上京ヲ促シ猶ホ家事上ノ要件ニ及ヒタルモ

ノナリ

拜啓愈以御堅固被成御坐奉敬賀候先日一封呈上候間御落手被下候筈松陰
よも兩日跡到着則今日玄高輪ニおひて争端を開き候處久々振ニ殊ニ勝
利面白事ニ御坐候是より樂際限有之ましく同氏の御傳言之趣も承知仕候
兎も角速ニ御出發有之度屈指御待申上候扱得能迄御申越之趣承幸明日其
縣官員就出立同道出立被致候甚御氣之毒ニ候得共却而御賢考通差返候方
可然与申談候矢太郎差添可申筈之處實之龍吉も病キニ而病院に參居別而
差支甚不本意之至ニ候得共官員同行ニ而候得ハ何も氣遣有之ましく得能
ナトニ申合右通取計候間不惡御汲取可被下候貴兄ニも御立腹之筈与親
察候得共必程克御叱置可被下候人心相替如面假令親子之間と雖とも決而
一樣ニ參候者ニ無御坐候間幾重よも御勘辨被成度分而御忠告申上候其地
の或は縣元ニ而も相付七妻帯ニ而も爲致候方御上策与存候御本妻御出張
之由さそれハ同居ニ而居合を御付被成候方大ニ宜クハ無之哉其方の大ニ

御安心あるへしと愚考仕候間乍餘計申上候付何分御熟慮可被下候餘ニ
前後之考慮ニ過き候ト果之無之候間よろしにか減ニ而御分別有之何も差
置キサツサト御出懸被成度當分ハ氣候無申分殊ニ高輪之住居ハ閑よあら
ぬ喧ニあらぬ一日御出被成候得共御壽命可延候ニ相違無之半鐘の高高と
御待設致居候必スく寸刻を争ひ御發途可被成候當方も別而靜謐就而ハ
種々之風説も御聞込ニ可有之候得共決而左ニ無之小子七七八年來始而如
此安氣亦世を涉り實ニ天幸与存候先右御斷旁如此何も不遠面晤之時
譲り候拜首

五月廿一日夜

利通

税所尊老臺下

猶々御出之節も吞用茶御持參被下候様乍御邪魔願申上候

【解説】松陰即チ五代友厚ハ十九日著京ス争端ハ例ノ圍碁戰ニ
シテ矢太郎隆吉共ニ利通ノ家來ナリ末文大坂會議ニヨリテ政

局少康ヲ告ケ利通ノ胸中晏如タリシヲ知ルナリ

一七二〇 山縣有朋への書翰 明治八年五月廿三日

(山縣公爵家藏)

【按】西郷従道米國博覽會事務局副總裁任命ニ付キ諒解ヲ求メタルモノナリ

拜啓愈以御堅固御入湯御相應之筈奉敬賀候扱西郷事此節米國博覽會事務局副總裁拜命仕候當人義御承知通不得止内情も有之平素嘆願之趣承居尤尊臺ハ分る御内談申上御聞込有之趣も承居候處折柄博覽會副總裁御治定不相成候不叶都合ニ而同人申立候次第ニ御坐候是非御打合之上取計不申候ハ不都合之義与相考候得共差懸之事ニ有之殊ニ外勤之事ハ兼而御承知相成候趣承候付前條之通取計候付不惡御汲量可被下候固より陸軍省鹿兒島等へ關係之事々大山罷居候得ハ西郷も同様之事故何も氣遣被下ましく候右次第同人差上委曲陳述可仕候付何も御聞取可被下候大略御斷

迄呈寸楮候早々拜具

五月廿三日

利通

有朋様

猶々時下御自愛御入湯專要所祈候

【解説】是月廿二日西郷陸軍中將ハ陸軍大輔兼任ヲ免セラレ米國費府博覽會事務局副總裁ニ任セラル依リテ利通ヨリ當時賜暇湯治中ノ山縣陸軍卿ニ事情ヲ述ヘテ爾後承諾ヲ求メタルニテ大山ハ陸軍少輔巖ナリ

一七二一 杉浦讓への書翰 明治八年八月二日

(大武丈夫氏藏)

【按】文書處理ニ付キ内務大丞タル杉浦ニ指示セルモノナリ

別紙二通御差回申候英公使の返詞原書差返候可然歟此旨早々申進候也

八月二日

利通

杉浦様

英公使に返翰早々可仕出

一七二二 伊藤博文への書翰 明治八年十一月廿一日 (伊藤公爵家藏)

【按】習志野ヨリ歸京ヲ報シ往訪ヲ通シタルモノナリ

益御安固奉賀候扱小子も昨日歸京仕昨夜松方よと御傳言之趣承今朝ハ
參上可仕之處遮而用向有之其儀不相調晝ハ森ハ離盃相企置候付何れ午後
三字比ニ相濟可申候間夫よと御近方通行候付御立寄可申上候若御差支も
有之候ハ、明朝拜趨可仕候間御待居被下度此旨艸々申上置候拜首

十一月廿一日

利通

博文高臺下

猶々小子も少々御談合申上度義も有之候

【解説】利通ハ十八日御名代有栖川宮ニ隨從シ岩倉公ト共ニ習

志野原演習閱兵ニ赴キ前夜歸京シタルナリ森ハ有禮全權公使
トシテ清國へ赴任ニ付キ精養軒ニ於ケル送別午餐會ニ招キタ
ルヲ以テ後刻伊藤ニ面會セントセルナリ

一七二三 岩倉公への書翰 明治八年十二月廿二日 (岩倉家文書)

【按】九州産ノ茶ヲ試味ノ爲メニ贈進セルモノナリ

今般勸業寮ニ於テ九州地方之山茶ヲ以テ支那流各種茶試製爲致候處摘採
時期ニ後レ香味共不充分ニテ候得共本年始テ製造相成候ニ付御試験之爲
メ別紙品書ニ通聊差進候也

明治八年十二月廿二日

大久保内務卿

岩倉右大臣殿

茶種品名

綠製

八品

青製

一品

紅製 五品

烏龍製 一品

青龍製 三品

以上 壹函入

一七二四 村田氏壽への書翰 明治八年十二月卅一日

(村田家藏)

〔按〕山田信道及ヒ新田義雄ノ進退ニ付キ答書シタルモノナリ
拜讀仕候昨日々御出被下久々振御高話承知仕辱奉存候別紙を則御返被下
慥ニ落手仕候扱白川縣山田氏之義兼人柄承居候間猶又勘考可仕候又御
咄申上置候新田之事明後日ニハ御内沙汰可相成候間早速御出會有之候様
いさゞ度尙此方御案内可申上候付左様御含可被下候拜答而已早々如此
候來人中亂筆御免可被下候頓首

十二月卅一日夜

利通

村田様

〔解説〕村田ハ内務省警保寮權頭白川縣ハ後ノ熊本縣ニテ山田
ハ六等判事タリシ信道新田ハ香川縣權令タリシ義雄ナリ

一七二五 覺書 明治八年

(大久保家藏)

〔按〕政務ニ付キ評議スヘキ條項ノ手扣ナリ

琉球人云々之事

一 岩村權令岐阜長野兩縣之間に轉任内願之事

一 前山精一郎警保寮七等出仕之事

内心云々之事

一 酒田縣云々紙幣大屬藤田氏より承知之事

一起多一條川路ヨリ云々承候事

大木の示談之事

一 森長義之事

一兵頭之事
一岩村之事

一國貞通信

十等出仕

一富田三藏

一高橋精一

一文部省五等出仕

西潟 訥

參事權令

一外務七等

岡田好樹

一歴史課之事

正院

杉 亨二

一七二六

山縣有朋への書翰

明治九年正月十七日

(山縣公爵家藏)

【按】朝鮮出張ノ全權黒田清隆ヨリ陸軍二大隊派遣ヲ要求シ來

レル電報ヲ廻送シタルモノナリ

別紙唯今黒田より電報到來候間則御差廻申上候五日ノ内二大隊出兵之事
子細分兼申候何れ一應電報打返し不申候ハ相成申ましく候得共不取敢
供尊覽候何も明朝御面會御談可申上候也

一月十七日

利 通

山 縣 殿

一七二七

琉球藩への内達案

明治九年二月

(大久保家藏)

【按】下賜金藩内頒布ノコト并ヒニ藩債消却ノ情況報告方ヲ内

達セントシタルモノナリ

去ル明治五年九月其藩御制定ノ際特別之譯ヲ以テ新貨幣并紙幣相交三萬
圓藩王へ下賜リ候儀ハ藩内ニ頒布シ人民其潤澤ニ浴シ候様トノ厚キ御趣
旨ニ有之候ハ言ヲ俟タス爾來藩内貨幣流通ノ道昔時ノ比ニ非サル可ク極
メテ藩民等 皇恩ヲ感戴可罷在候就テハ最前右金額分賦ノ方法并ニ藩内

流融ノ景況等詳細可申聞事

前同年十月中其藩負債貳拾萬圓政府御引受ノ上御處分可相成ニ處其節來朝ノ使臣ヨリ藩限リ消却致度懇願ノ趣有之右金額東京ニ於テ借替候ハ、利息モ減省可相成トノ篤キ御趣旨ヲ以テ其藩年々積出候砂糖ヲ抵當トシ五ヶ年賦元利皆濟ノ約締ヲ以テ大藏大輔之ヲ保證シ東京第一國立銀行ヨリ貳拾萬圓ノ額借用致シ既ニ三ヶ年余ノ歲月モ相立候ニ付テハ追々藩債消却ノ道モ相立候義ニ可有之條々右負債處分ノ方法順序等詳細可申聞事右ノ件々至急取調可申出此旨相達候事

明治九年二月

内務卿

一七二八

村田氏壽への書翰

明治九年三月九日

(天久保家藏)

【按】鹿兒島縣提出ニ係ル警察費増額ノ上申書ノ取調方ヲ内命シタルモノナリ

猶々御聞糺有之候前一應申上置度義も有之候

昨日申上置候鹿兒島縣警察費増額之義猶承合候處表向上申致候趣ニ候間差出候上委曲御聞糺有之度仍亦昨日差上置候書類ハ御返却可被下候此旨艸々拜具

三月九日

利通

村田殿

一七二九

巖谷修への書翰

明治九年三月十日

(巖谷家藏)

【按】李鴻章へ紹介狀ノコトニ付キ來臨ヲ求メ猶ホ三木原支那派遣ノコトニ及ヒタルモノナリ

愈御安固被成御務奉敬賀候扱李鴻章へ添書之儀ニ付猶御示談申上度候付今日午後五字比より御入來被下ましくや若御差支も候ハ、明後朝御出懸ニ亦も宜ク御坐候且先夜御咄申上候三木原支那行之事如何之事ニ候哉昨

夜同人參候亦既ニ御内定相成候哉ニ承是非此度々願吳候様類ニ承候小子
も初發よと請合居候義も有之殊ニ同人爲人至る實着必其詮可有之見受
申候付何卒此度々御撰ニ不洩候様御取計被下度此旨御願申上候

三月十日

利通

巖 賢臺下

一七三〇 松方正義への書翰

明治九年七月廿九日

(高橋於菟次氏藏)

【按】諸縣廢合ノ評議ニ付キ來會ヲ求メタルモノナリ

尙御安固奉拜賀候扱御談之義有之候付今午後一字比よと拙宅に御入來被
下度第一諸縣廢合之義差懸御熟談いよと度候此旨乍自由艸々御願申進候
也

七月廿九日

利通

松方殿

【解説】是日松方ト會見セシコトニ關シ日記ニ「一字ヨリ松方子
林少輔松田大丞杉浦大丞松平少丞入來諸縣廢合ノヲニ付談合
ヲ遂ケ候」ト見ユ

一七三一 山縣有朋への書翰

明治九年十一月朔日

(山縣公爵家藏)

【按】山縣ヨリノ來訪中止ノ書ニ答ヘタルモノナリ

拜讀仕候陳々昨夜之報知賊情相變候付前議之通兵隊三田尻に御差向可相
成候付今朝御入來之儀御斷念之御事い細承知仕候山口より巡查二百名差
出候様請求ニ付先百名丈繰出候都合ニ取計申候付御心得迄ニ申上置候此
旨拜復旁如此御坐候艸々拜具

十一月一日

利通

山縣有朋殿

【解説】前原一誠ノ亂起ルヤ前日山縣ハ山口へ派兵ノコトニ關

シ利通へ會見ヲ約セシカ尋イテ賊ノ狀勢一變セシノ報達セシ
ヲ以テ參邸ヲ見合スヘキ旨ヲ通知セシナリ

【參考】山縣有朋より大久保への書翰 明治九年十一月朔日

(大久保家藏)

候一條付御談別 (虫喰) 仕

今朝參堂須佐より脱走之賊徒乘組雲州へ (虫喰) 候一

處午後之報知ニ而テ賊情大ニ變候間猶前議通り大坂より之出

兵ハ三田尻へ (虫喰) 可然事ト存候且今朝電報を以指令ニ及置候間今朝

ハ拜趨不致候猶此後之報知 (虫喰) 御急報可仕候草々頓首

十一月一日朝飯後 山縣 朋

一七三二 山縣有朋への書翰 明治九年十一月朔日

(山縣公爵家藏)

【按】山口ヨリノ電報ヲ廻送シテ巡查派遣ノ事情ヲ報シタルモ

ノナリ

唯今別紙之通山口縣より電報有之候付入尊覽候昨夜巡查二百名を請求申
來候付不取敢百名差出候都合ニ取計明日之船ニ出發之筈有之候猶其餘ニ
三百名差出候様申來候得共今朝も御紙面被下候通三田尻ハ一大隊之兵を
御差向相成候得ハ別段ニ巡查差出候ニハ不及与愚考仕候尤前原脱走捕縛
之爲ニハ外ニ一百名雲伯ニ差向候事ニ有之萩表殘徒而已捕縛之爲おれハ
一百名差廻候得ハ十分ニ可有之候林よ之電報よれハ萩殘徒ハ五十名
与有之候仍右通ニ取究先一百名丈ニ而別ニ不差出趣返詞いさ置候三
浦にも談合之上与有之候付若何与歟陸軍省ハ懸合有之候歟も難圖爲念右
之形行申上置候猶御氣付も有之候ハ、爲御知被下度候此旨艸々拜具

十一月一日

利 通

山縣陸軍卿

【解説】山口縣令關口隆吉ヨリ巡查二百名派遣ノ請求アリシカ
ハ先ツ百名ヲ派遣シタルニ更ニ重ネテ三百名派遣ノ要求アリ

然モ當時既ニ大坂ヨリ一大隊ヲ三田尻ヘ派兵ノコト、決定セシヲ以テ其ノ必要ナルヘキ旨ヲ述ヘタルナリ

(大久保家藏)

【参考】山縣有朋より大久保への書翰 明治九年十一月一日
拜讀巡查百名山口より出張之義ハ既ニ御決議ニ相成何事も不申上候處尙又請求之義更ニ不相分最早戦端を開き候上ハ鎮臺兵ニ神速討伐致候儀當然之事ニ有之候別ニ三浦よりハ何事も不申參候大坂より二中隊玉浦丸ニ而既ニ出兵致サセ候尤高島品川兩士ハ未着港無之由兎角懸念無之様御序縣令へ御指令企望仕候拜頓
山縣
大久保殿

一七三三 山縣有朋への書翰 明治九年十一月朔日

(山縣公爵家藏)

【按】廣島鎮臺司令長官少將三浦梧樓ヨリノ電報ヲ廻送シテ對策ニ付キ意見ヲ述ヘ猶ホ明日來邸ヲ求メタルモノナリ

拜讀別紙三浦氏より電報御差廻被下一讀仕候猶今日中賊徒情勢等相分候ハ、御示被下候様奉願候模様ニ依總督派遣之御處分も可有之候得共差當り神速實地之運尤緊要ニ可有之与存候賊勢増盛之勢も立至候得ハ無論ニ候得共先僅々たる山賊同様之事ニ有之候得ハ此上之模様ニ而可然先目今ハ機に投して神速ニ根據を斷滅するを目的といふ度愚考仕候種々御談も申上度候得ハ明朝御入來被下候得ハ別ニ大幸ニ奉存候此際引籠御足勞懸上候義萬恐懼仕候得共御海容奉願候愈御出被下候得ハ伊藤氏へも相願可申候貴答旁艸々拜首

十一月一日

利通

山縣 有朋殿

猶々別紙差上候筈ニ而唯今認置候處御使ニ預リ候付其まゝ差上候間左様御承知可被下候

【参考】山縣有朋より大久保への書翰 明治九年十一月一日

(大久保家藏)

別電報只今到手即さし出申候夜來萩之賊情大ニ變態を生し戰爭も突
然差起候様被察候士官兵卒其死傷聊有之トノ報知ニ就テハ朝來戰爭
之景況賊徒之情勢等電報を以概略申越候様申遣し置候今日中ニハ相
分可申固より賊徒情勢之模様ニ依征討總督ニも派遣被仰付應機處變
之御處置可有之候得共即今之模様ニテハ神速討伐他ニ波及無之を要
點ト致候外無之事ニ愚考仕候他ハ明朝參堂縷述可仕候頓首

十一月一日

山縣有朋

大久保殿

一七三四 黑田清隆・川村純義への書翰明治九年十一月六日

(黒田伯爵家藏)

【按】山口縣ヨリノ電報ヲ廻送シタルモノナリ

別紙山口縣之電報唯今到來候間則爲御知申上候也

十一月六日

利通

黒田殿
河村殿

一七三五 黒田清隆への書翰明治九年十一月六日

(黒田伯爵家藏)

【按】明朝來邸ヲ求メタルモノナリ

別啓

甚御面倒ニ至ニ候得共明朝御出仕懸御立寄被下候様奉願候也

十一月六日

利通

黒田様

一七三六 重野安繹への書翰明治九年十一月十四日

(大久保家藏)

【按】圍碁戦ニ勸誘シタルモノナリ

尙々何分御答可被下候御出被下候ハ、日下部も御誘見可被下候

愈御壯固奉敬賀候扱今日御差支無御坐候ハ、御退出御入來被下ましく
や秀榮も相見得且吉田六左兼御手合相望居候付同人も相招可申候此旨
艸々拜首

十一月十四日

利通

重野先生

一七三七 重野安繹への書翰

明治九年十一月十五日

(大久保家藏)

【按】秀榮への書ヲ托セラレシニ對シ答へタルモノナリ

敬讀陳去秀榮未掩留ニ付御書面則相渡申候昨夕御出之處何も失敬又相企
可申候此旨貴答艸々拜首

十一月十五日

利通

重野賢臺下

一七三八 覺

書明治九年

(大久保家藏)

○廣業會社云々ノ事

石崎の答ノ事

○岩公の畫圖面十五日迄差上候事

○授産局云々ノ事

一七三九 覺

書明治九年

(大久保家藏)

一雇人之事

一熊本電信之事

一重野の歴史掛ノ事

一五代の雜誌ノ事

一富田三藏

一七四〇 岩倉公への書翰 明治十年正月七日

(岩倉家文書)

【按】宮内省豫算等ノコトニ付キ答書シタルモノナリ

拜讀仕候別番六通體ニ落手仕候以テ條被示聞趣承知仕候宮内省定額別段
思食云々之事一應御止相成候事異存無御坐候何も明日退出懸參上旁可奉
申上候此旨拜答如此御坐候頓首

正月七日

利通

具視公閣下

一七四一 岩倉公への書翰 明治十年正月十日

(大久保家藏)

【按】來臨ヲ通セラレシニ對シ答ヘタルモノナリ

拜讀仕候扱御談之議被爲在明朝十時比御入來可被下趣奉長候少々持病ニ
亦今日も不參恐縮仕候御請迄早々拜首

一月十日

利通

岩倉公閣下

一七四二 木戸孝允への書翰 明治十年正月十八日

(木戸侯爵家藏)

【按】所勞見舞ヲ謝シタルモノナリ

雲章敬讀益以御安康被成御坐奉肅賀候陳ハ就所勞預御懇問殊ニ結構之御
品爲御見舞御惠贈被下別ニ難有拜受仕候頃日快方相赴候付乍憚御解念可
被成下候不日全快之上拜趨可奉厚謝候得共其内御請御禮艸々拜具

一月十八日

利通

松菊老臺下

再伸

過日ハ爲御見舞御賁臨被下候由平臥中ニ甚失敬何卒御海量所仰候
也

一七四三 佐々木高行への書翰明治十年六月十八日

(佐々木侯爵家藏)

【按】高知ノ狀況探索ノ爲メ伊與木少警部派遣ノ旨ヲ述ヘシモノナリ

御書面之趣委細致承知候猶伊與木警部其地へ爲探偵差出し候ニ付委細御聞取有之度爾後之御報相待ち候也

十年六月十八日

伊藤 參議
大久保内務卿

佐々木議官殿

別紙御届申候也

【解説】佐々木ハ當時元老院議官タリシカ縣地不穩ノ故ニ陸軍中佐北村重頼ト共ニ是月八日高知出張ノ命ヲ受ケ十三日入縣セルナリ少警部伊豫木與三郎ハ曩キニ立志社員村松政克藤好靜逮捕ノ要務ヲ帶ヒテ土佐ニ出張シ歸坂復命セシカ再ヒ出張

ノ命ヲ受ケ十九日高知ニ至ル本書ハ其ノ際伊豫木ノ齋ラセルモノニシテ猶ホ次ノ書翰ニテ之レカ事情ノ一端ヲ知ルヘシ

【参考】其一 佐々木北村より三條大久保伊藤西郷への書翰明治十年六月十五日

拜啓陳去本月十三日午後四時半頃高知着縣之處先以今日迄ハ何も異事無之候乍併一般の人心は不穩所々へ會合等致候趣委細の事情ハ少警部伊豫木與三郎より御聞取被下度候將兼て御託し相成候村松政克藤好靜兩人は昨夜捕縛致候警部に於て取糺候處愈九州行致候事ハ白狀ニ及候へ共全く商用の爲と申唱候就ては縣廳ニ於て十分取糺し同類等も有之候は、追て着手可致筈ニ候へ共何分警部巡查等ニて十分の取糺も出来兼情實も可有之哉或ハ同類等の爲取逆し候様の義も難計掛念不少候間先以速ニ差送候様權令と示談仕警部巡查差添上坂爲致候間右事件も是又伊與木少警部より御聞取被下度候也勿々

十年六月十五日

北村 重頼

佐々木高行

三條公

大久保參議宛

伊藤參議

西郷中將

二仲縣地の景況不穩の趣御聞取相成候共未だ兩人罷在候以上は決して陸海軍又は巡查隊等御差向の義ハ何分共御見合被仰付度此の上兩人共斃候場合ニ立至候は、何分の御處分も可有之と存候此度兩人入縣致候儀は飽迄も兵力を用ひず鎮靜に及候様相心掛候儀ニ付其邊の處は御了解有之度伏て希望仕候也

【参考】

其二佐々木高行より三條大久保伊藤への書翰 明治十年六月廿八日

本月廿三日附尊翰忝拜誦益御清穆の御旨奉拜賀候次ニ小弟事無事ニ消光罷在候間乍憚左様御休神可被下候電報御示之西南も追日相運爲

國家幸甚此事ニ御座候京攝間御靜平の趣是又爲國大慶の事ニ御座候扱縣地も今日の光景ニてハ何も不相替候得共過日來御取糺相成候藤村松二人の連類御着手の場合ニ立至り候は、少々ハ動搖も可致哉難計候へ共可恐程の事ハ決て無之候極度にて縣廳を叩き潰し二三の者を害し脱走位ニ出すと見据へ相附候間左様御安心被下度候此頃立志社員中申合せ他縣不致一纏めニ致置候由口實とする所此頃臺兵入縣ニ付きての事申居候是れ如何なる見込歟可笑同社ニては演舌會頗る盛なる事ニ有之候處何分政體を誹議するの說有之趣の處此節を附候歟穩なる演舌の由相聞申候扱又靜儉社長原傳平ニ再三面會致候處同社ハ大義名分判然相心得候間決して賊援を相成し候事無之段申唱へ候又東西郷士連も今日ハ先以靜平の光景ニ御座候小弟輩日々來客種種の風評も承り込中には事情に迂遠なる說を承り困却ニ御座候へ共追々事情相心得候様ニ至り候者往々有之且是れ迄賊の強勢を唱へ候

向々も此頃ハ大ニ相挫け候趣に御座候尙此度本山茂樹則高行甥なる者歸京致候間何卒委細御聞取可被下候頓首

明治十年六月廿七日

佐々木高行

三條殿

大久保殿

伊藤殿

【参考】其三西郷従道より佐々木北村への書翰 明治十年六月十八日

少警部伊與木與三郎御差遣相成り御書面落手尙同人よりも近況委細の次第致了承候村松政克藤好靜兩人捕縛の義ニ付てハ不一方御盡力被成下爲其顯然確証を得候段厚謝の至ニ御座候仍て爾後の形勢及將來見込の處篤と御問合の爲め平安丸ニて伊與木警部と共に前野大尉差立候間委曲同人へ御含め御差返被下度此段御回答旁得貴意候也

明治十年六月十八日

陸軍中將西郷従道

議 官佐々木高行殿

陸軍中佐北村重頼殿

追て本營より致到着候西郷(大西郷)より別府への書簡等及景況は過る十六日郵便を以て差送候間定めて縣令より御落手御一覽の事と存候右ハ確信すへき者と存候也

一七四四 佐々木高行・北村重頼への書翰 明治十年七月六日 (佐々木侯爵家藏)

【按】高知歸縣中ノ佐々木北村ノ來書ニ答へ村松藤ノ犯行證據審糺ノ情況ヲ報シタルモノナリ

去月廿四日附縷々の御書面一々披誦致候炎熱の際何分御苦慮の事と存候陳は該縣下景況過日來追々正順ニ歸候方ニて向後格別の動搖も有之間敷哉の旨承知致候就ては村松藤兩人の口供上ニ付板垣片岡の兩名關係於有之ハ斷然着手此際禍原を絶候は、自ら社中の瓦解ニも可及云々承知致候

右ハ先般來當警吏を以て順次糺間被致候處別紙口供の通りに有之未だ兩名へ着手可致證跡明瞭ニ無之依て速ニ東京へ護送致し大審院ニ於て逐一遂審糺候上其證跡彌判然致候へハ速ニ着手可致事ニ評決致シ候條此段御承知猶此上厚御注意御盡力有之度委詳中村大書記官へ申含差遣し候間同人口頭より御聞取有之度右回答如此ニ候也

明治十年七月六日

三條太政大臣

大久保參議

伊藤參議

佐々木議官殿

北村陸軍中佐殿

追て西郷中將ニも幸出京ニ付及協議候也

【參考】北村重頼佐々木高行よりの書翰 明治十年七月十一日

本月六日御書翰奉拜見候先以て各位益御壯榮の旨爲國家奉拜賀候陳

ハ村松藤兩人口供御差廻相成候處未だ關係の向に證跡明瞭ニ無之依て速ニ東京へ護送相成大審院ニ於て逐一遂審糺候上其の證跡判然致シ候上ハ速ニ着手可相成御評決の様就てハ此上厚く注意盡力可致御沙汰の御趣意夫々諒承仕候尙委詳の義ハ中村大書記官の口頭ニ相托シ候間御聞取相願候右尊答迄如斯ニ御座候也

七月十一日

北村重頼

佐々木高行

一七四五 伊藤博文への書翰 明治十年七月十六日

(伊藤公爵家藏)

【按】九鬼隆一ヨリノ探偵書ヲ廻送シタルモノナリ

神奈川縣令よりの來翰ハ落手仕候別紙九鬼隆一方此内よりの續キ之探偵書之由ニ差出候間既ニ經高覽候歟も難圖候得共御廻申上候間御濟次第條公に御差出可被下候也

十六日

利通

伊藤 殿

【解説】九鬼隆一ハ文部大丞高知立志社ノ行動ヲ始メ四國諸縣ト薩軍トノ關係ヲ探索シ密報ヲ送リシナリ

【参考】九鬼隆一より大久保伊藤への書翰 明治十年七月十日 (大久保家藏)

肅啓追日炎熱ニ迎候得共御旅中益御清勝奉謹賀候爾後彼件ニ付別段ニ報知も無御坐候處別紙今日到達仕聊右關係を有するものニ御坐候間郵送日數を経既ニ舊聞ニ屬シ候得共不取敢奉供御參看候態々御却下被下ニハ及不申御閱覽後直ニ御投火被成下度爲夫奉捧寸楮如此ニ候稽首謹言

七月十日

九鬼隆 一再拜

大久保公 閣下

伊藤 公

一七四六 佐々木高行・北村重頼への書翰 明治十年七月廿九日 (佐々木侯爵家藏)

【按】御還幸ノ事情ト爾後ノ取計方ヲ述へ更ニ東京ニ於ケル藤村松等裁判進行ノ模様ヲ報シタルモノナリ

拜啓酷暑の砌益御安固奉欣賀候

聖上ニも還幸被仰出昨廿八日御滞なく神戸御發艦 皇后にも御同一供奉ハ三條殿伊藤參議にて下官には明後三十一日郵船にて歸東の筈ニ御坐候抑も急速ニ還幸被仰出候儀ハ 聖上少々御脚氣症にて唯今の内速ニ土地を被爲替御豫防被爲在度侍醫中より分て申立も有之不得止次第にて右の御運ニ相成候儀ニ有之其邊御汲量有之度西郷中將も九州へ出張被命去る廿六日出船相成候是ハ御使等の義も有之且軍務上ニ於ても是非出張致度との内願も有之候事ニ候尤日數十五日位にて往復の筈ニ候跡ハ鳥尾中將御用取扱致居候尤其地の行掛り等ハ渡邊中佐滋野中佐能承居り西郷よりも話置候ニ付決して連接不致候様の事ハ無之候間御疑念有之間しく候戰地

の方も意外遷延ニハ候得共既ニ都の城ハ陥り順々相運ひ候ニ付此上ハ格別手間も取れ申間舗と愚考致し候日州并ニ豊後路の戦も賊の銃丸ハ鍋鐵唐金多く候由兵氣も余程くぢけたる趣なり

中村大書記官も一昨廿七日歸京有之藤村松も東京臨時大審院ニ於て三席糺問有之候由猶々口ヲ開き候事柄も有之追々詰問候は、奥意叩出し候半かと被存候關係の者御呼出しの事も既に 還幸被仰出 御出輦の際ニ有之何も一同歸東の上御手順相立候方可然との事に相成候委曲ハ中村氏よりも書通の筈に有之貴官ニも殊の外長御滯留甚御苦勞の至ニ御坐候何れ大概結局の上ハ御担任可被下候様致希望候

右大略申進度如此余ハ追て可申上候也

七月廿九日

大久保利通

佐々木議官殿

北村 中 佐殿

本文の趣小池へも御致意可被下候

林有造ハ大坂滞在近便ニて東行の趣に候

岩神昂以下ハ東京へ護送相成候

猶新撰旅團東伏見宮司令長官鹿兒島へ出張黒田中將も出張被命西郷も一同出船ニて候へハ官軍益々相奮可申候

【解説】立志社員藤好静村松政克兩人ヲ審問スルモ口供ノ證跡

未タ明瞭ナラサルモノアリ依リテ更ニ東京ニ護送シ大審院ニ於テ審糺セシムルト共ニ大書記官中村弘毅ハ土佐ニ赴キ立志社員ノ行動ヲ調査スルトコロアリ是月十三日歸京セルカ更ニ藤村松ノ東送ニヨリテ翌日直チニ東京出張ヲ命セラレ任終へ
廿七日歸洛セルナリ

一七四七 伊藤博文への書翰 明治十年八月十九日

(伊藤公爵家藏)

【按】富岡熊本縣令ヨリノ電報ヲ廻送シタルモノナリ

別紙電報到來候付入御一覽候先々好都合ニテ無此上候此旨艸々拜具

八月十九日

利通

伊藤殿

一七四八 船越衛への書翰 明治十年十一月廿五日

(岩倉家文書)

【按】池田德潤轉勤ノコト華族會館ニ於テハ異議ナキ旨ヲ答へ

タルモノナリ

益御安固奉賀候陳々此内承居候池田德潤區長轉勤之事華族會館ニ方承合置候處別ニ異存無之旨返詞有之候付左様御承知可被成候尤別紙供御一覽候此旨如此候也

十一月廿五日

利通

船越 衛殿

一七四九 佐々木高行への書翰 明治十年十二月三日

(佐々木侯爵家藏)

【按】來邸ノ日時ヲ問合セタルニ答へタルモノナリ

拜讀陳ハ御談の儀有之明日より先兩三日の内御入來可被下趣承知仕候來る六日迄ハ先約有之候に付七日午後三時より御入來被下候へは差支無御坐候尤五時半頃よりハ外ニ約束有之ニ付左様御承知可被下候此旨拜復迄早々如此拜具

明治十年十二月三日

利通

高行老臺

一七五〇 覺書 明治十年

(大久保家藏)

四等相當

貳百五拾圓

二百圓 大書記官

- 五等相當 貳百圓
- 百五拾圓 權大書記官
- 六等相當 百五拾圓
- 百圓 少書記官
- 七等相當
- 八拾圓 權少書記官
- 奏任以上
- 八等 七拾圓
- 六拾圓 一等屬
- 九等 五拾圓
- 五拾圓 二等屬
- 十等 四拾五圓
- 四拾五圓 三等屬

大久保利通文書卷四十七

本卷ニハ年代不明ノ文書ヲ收ム故ニ多少史
料トシテハ價値ヲ缺クモノナキニ非スト雖
モ今參考ノ爲メ特ニ收ム

一七五一 三條公への書翰 二月十七日

(三條公爵家藏)

【按】晚餐會へ招待シタルモノナリ

謹啓陳來ル廿一日晚餐進供仕度候付御差支不被爲在候ハ、午後第五時
弊舎へ御來賁被下候ハ、大幸之至ニ候此旨奉願度艸々拜具

二月十七日

利通

三條公閣下

猶々外人も相招候付御臨席被下候ハ、小禮服御着用被下候様奉願候
何分否拜承仕度候也

一七五二 岩倉公への書翰 四月九日

(岩倉家文書)

【按】官祿ノコトハ猶豫セスシテ決定スヘク後刻參上ノ旨ヲ述
ヘシモノナリ

殊之外風烈相成候處先以御安康被爲入奉大慶候然ハ昨夕ハ御書被成下奉
謹誦候官祿七兩定メ云々之事夜前西郷ニも參御評議ニ次第承申候小子
も吉田を以一應承候儀よて決出シ拔キ之譯ニハ無御坐候乍去御評議ニ
通判任已下之處ニ分相立候得ハ可然事ニ奉存候猶委曲御直ニ可奉申上候
尤今日ハ是より參 朝之心得ニ御坐候實ニ如此猶豫相成候ハ不相濟候
間段々愚考も御坐候付尙御伺可申上候乍延引拜復まで如此御坐候頓首

四月九日

利通

岩倉公

一七五三 岩倉公への書翰 四月廿六日

【按】公ヨリノ來示ニ對シ答ヘタルモノナリ

敬讀仕候被爲示聞條々委曲拜承仕候明日延遼館ニハ出會之筈ニ付其節何
も承知可仕御請迄草々如此御坐候也

四月廿六日

利通

岩倉公

一七五四 岩倉公への書翰 五月廿三日 (岩倉公舊蹟保存會藏)

【按】指示ノ時刻ニ參邸ノ旨ヲ答ヘタルモノナリ

再應尊墨敬讀仕候被示聞趣奉畏候四時頃ハ拜趨可仕候此旨拜酬迄如此御
坐候也

五月廿三日

利通

岩倉公閣下

一七五五 岩倉公への書翰 八月九日

(島村久氏藏)

【按】岩倉公舊隱岐邸讓受ニ付キ黒田ヨリノ書ヲ廻送シタルモノナリ

益御安固被遊御坐奉敬賀候扱此内御談拜承仕候舊隱岐邸ノ儀別紙ノ通黒田ヨリ申來候付速ニ御着手被爲在度此旨早々爲御知申上候拜白

八月九日

利通

岩倉殿下

猶々黒田方へ御讓申上候趣是ヨリ申遣候吉井モ異議無之候得共時宜ニ依御配分相願候モ難圖候付其段御含被置可被下候

一七五六 岩倉公への書翰 八月廿一日

(大久保家藏)

【按】明朝來邸ノコトヲ通セラレシニ對シ答へタルモノナリ御書奉謹讀候然々御談被下候件々被爲在候付明朝御來駕可有之旨奉畏候此段御請奉申上候頓首々々

八月廿一日

大久保利通

岩倉亞相公

一七五七 岩倉公への書翰 九月廿三日

【按】來邸ヲ求メラレシニ對シ答へタルモノナリ

尊墨拜讀仕候今日四字以上參上候様奉畏候午後一字比々拜趨可仕此段拜答如此御坐候也

九月廿三日

利通

岩倉公閣下

一七五八 岩倉公への書翰 十二月卅一日

(大久保家藏)

【按】書類ヲ送ラレシニ對シ答へタルモノナリ

拜讀仕候丹羽ヨリノ二通并ニ外壹通儘ニ落手仕候猶一覽大隈へ可相廻候

壹通一覽ノ上御返上可仕候只今來人中別段御細答不申上候拜答迄艸々頓首

十二月卅一日

利通

具視公閣下

一七五九 伊達宗城への書翰 四月廿四日

(伊達侯爵家藏)

【按】佐土原及ヒ品川日記ノコトニ付キ答へタルモノナリ

拜讀仕候佐土原今日被爲示聞趣敬承仕候品川日記ハ當分回覽相成候付相濟次第差上候様可仕候此旨拜復迄艸々如此拜白

四月廿四日

利通

伊達公

一七六〇 伊達宗城への書翰 四月三十日

(伊達侯爵家藏)

【按】依頼ヲ受ケタル品川ノ日記ヲ送附シタルモノナリ

兼承候品川日記差上候御讀濟御返却可被下下坂仕居候故甚延引仕候謹白

四月三十日

利通

伊達公

一七六一 伊藤博文への書翰 五月廿五日

(伊藤公爵家藏)

【按】大山鹿兒島縣令ノ書面ヲ廻送セラレ猶ホ明朝訪問スヘキ通知ニ對シ答へタルモノナリ

拜讀大山縣令書面儘ニ落手仕候明朝御入來被下候趣承知仕候何も差支無御坐候間御出可被下候此旨貴答迄勿々拜首

五月廿五日

利通

伊藤賢臺下

一七六二 伊藤博文への書翰 八月五日

(伊藤公爵家藏)

【按】岸良ヨリノ返書ヲ廻送シタルモノナリ

別紙岸良返詞到來候付御廻申上候何を明日拜表御談可申上候此旨艸々拜具

八月五日

利通

伊藤賢臺

一七六三 伊藤博文への書翰 十二日

(伊藤公爵家藏)

【按】明日登閣ノ件ニ付キ問合セタルモノナリ

明日ハ御參有之候ヤ若御不參候ハ、少々御談申上置度義有之候間烏渡御伺申上候也

十二日

利通

伊藤殿

一七六四 伊藤博文への書翰 廿七日

(伊藤公爵家藏)

【按】電報及ヒ山縣有朋ヨリノ返書ヲ廻送シテ山縣へノ談合不

必要ノ旨ヲ通シタルモノナリ

別紙電報格別相變候義も無之候得共入御覽置候且明朝御評議前山縣へ御談合之義申上置候へ共別紙之通山縣へ返書到來候間別ニ御苦勞被下ニ及不申候と存候間爲御心得此旨勿々申上置候何も明朝拜眉ニ讓候也

廿七日

利通

博文殿

一七六五 黒田清隆への書翰 八月十三日

(黒田伯爵家藏)

【按】書圖ヲ返送シ猶ホ他ノ一通ニ記入方ヲ依頼シタルモノナ

別紙書圖面任御沙汰返上仕候外ニ一通ヲ差上候付甚御面倒之至恐縮候得共書入方御命シ被下候得ハ別亦大幸ニ御坐候此旨艸々拜具

八月十三日

利通

黒田賢臺

一七六六 黒田清隆への書翰十一月廿日

(黒田伯爵家藏)

【按】來邸ヲ乞ヒタルモノナリ

今夕四字頃御入來被下候得之仕合ニ御坐候此旨艸々拜具

十一月廿日

利通

清隆様

一七六七 松方正義への書翰十一月廿八日

(大久保家藏)

【按】談議ノコトアリテ來邸ヲ乞ヒタルモノナリ
益御壯固奉拜賀候扱少々御談申上度義有之候付明朝御出懸ニ亦も御立寄被下度乍御面働御願申上候此旨早々拜具

十一月廿八日

利通

松方様

一七六八 寺島宗則への書翰正月十五日

(寺島伯爵家藏)

【按】横濱居留地へ巡查ヲ増員スヘク大藏卿へ談議シタル結果ヲ報シタルモノナリ

尙々明後日早速爲相運候筈也今日御談シ申上置候遺失物云々之事至急御運させ可被下候

拜談仕候横濱巡查増員ニ義過日相伺置今日も取調候處大藏省より未上申無之趣ニ付則大藏卿へ相談シ明後日差出可申与之事ニ候右上申之趣意也

五十名巡查相増居留地に分る振向候筈猶表通之御答も可申上候得共形行御報迄艸々拜首

一月十五日

利通

宗則殿

一七六九 寺島宗則への書翰

正月十六日

(寺島伯爵家藏)

【按】寺島主催ノ外國公使接待會へノ出席ヲ斷リタルモノナリ今日外國公使就接待出席之含ニ候處不得止義有之其儀不相調候付御斷申上候間宜御含可被下候此段早々頓首

正月十六日

利通

宗則様

一七七〇 寺島宗則への書翰

四月十日

【按】別紙ヲ返上スルニ際シ添書セルモノナリ別番一覽返上以し候間御落手可被下候内々ニある大臣殿へハ御覽ニ入置候方可然歟と存候此旨艸々拜具

四月十日

利通

寺島様

一七七一一 佐々木高行への書翰

九月十五日

(佐々木侯爵家藏)

【按】朝鮮事件ニ關スル書類ヲ呈出セルモノナリ御書面拜見仕候然ハ朝鮮事件書類差出候様承知仕候則別紙差出候間御落手可被下候此段御答迄早々頓首

九月十五日

利通

佐々木高行殿

一七七二 吉井友實への書翰 二月廿一日

(大久保家藏)

【按】遊歩ノ勸誘ニ答へタルモノナリ

御隙ニ候ハ、きじ橋牧馬方へ御遊歩被成ましくや

二月廿一日

吉井

大久保様

(右裏面返詞)

御免

承知仕候只今來客中ニ候間相濟次第御供可仕候御立寄可被下候也

即刻

大久保

吉井様

一七七三 吉井友實への書翰 四月七日

【按】木場清生辭表提出ニ付キ伊藤ノ都合ヲ問合セタルモノナリ

今朝伊藤方都合ハいるゝ候や模様次第ニ木場ノ辭表差出候筋早々爲運
可申与存候鳥渡御尋申上候也

四月七日

大久保

吉井様

一七七四 吉井友實への書翰 五月三日

(大久保家藏)

【按】伊地知正治進退ノ儀ニ付キ更ニ本人ノ決意ヲ確カメンコ

トヲ依頼シタルモノナリ

伊地知一條今日可申上含候處猶又相考候ニ昨夜ハ酔中之由ニ候へハ若其
時ニ至否申立候様有之候ゑ甚不都合ニ次第ニ付爲念今一應御推し詰置
被下彌無相違得心之事候ハ、其上條公へ申立候様可致此段早々拜首

五月三日

利通

友實様

一七七五 吉井友實への書翰 五月四日

(大久保家藏)

【按】木場清生邸へ基會ノ同伴ヲ通シタルモノナリ

今日木場の御出被成候ハ、御供可仕候此旨早々頓首

五月四日

大久保

吉井様

一七七六 吉井友實への書翰 五月廿六日

(大久保家藏)

【按】基會ニ同伴ヲ勸誘シタルモノナリ

鎌藏も參候間此方へ御出懸被成まゝくや閑所も有之候付御同道可申上候也

五月廿六日

甲東生

三峰君

一七七七 吉井友實への書翰 六月二日

(大久保家藏)

【按】同伴ヲ約セシモ來人アリテ遅刻ヲ報シタルモノナリ

今朝無據來人有之少々遅刻ニ及候間御先ハ御出居可被下候此旨早々拜首

六月二日

大久保

吉井様

一七七八 吉井友實への書翰 六月廿八日

(大久保家藏)

【按】内田政風來邸ニ付キ招キタルモノナリ

今日五時分内田へ入來申遣候間御退出ヨリ御立寄被下度此段早々頓首

六月廿八日

大久保一藏

吉井幸輔様

一七七九 吉井友實への書翰 八月十一日

(大久保家藏)

【按】中井弘宅ニ會合ヲ誘引シタルモノナリ

今日亥十一字ノ公使館ニ參歸懸中井ニ立寄ニ約束致置候別ニ御趣向無之候ハ、御出懸被成ましくや早々頓首

八月十一日

大久保

吉井様

一七八〇 吉井友實への書翰 八月十七日

(大久保家藏)

【按】遊獵勸誘ノ書ニ答ヘタルモノナリ

拜讀別紙一覽返上仕候夕六字よと出懸可申候此旨早々頓首

八月十七日

利通

友實様

一七八一 吉井友實への書翰 八月廿四日

(大久保家藏)

【按】勝安芳入來ニヨリ來邸ヲ求メタルモノナリ

房州入來候間御入來被成ましくや此旨早々已上

八月廿四日

大久保

吉井様

一七八二 吉井友實への書翰 九月十七日

(大久保家藏)

【按】雨天ニ付キ約束ノ高輪別邸ニ於ケル碁會ヲ中止シ本宅ニ

テ催スコトヲ通知シタルモノナリ

此模様よるゑ高輪迄おひどく候付此方ニお相催候付御都合御出可被下候
木場ハ此邊ニ出懸候筈候や無左候ハ、可申遣候若一泊ニおゑ無之候哉艸
々拜白

九月十七日

吉井様

三百四
利通

一七八三 吉井友實への書翰十一月五日

(大久保家藏)

【按】吉井大坂行ニ付キ面談ノ件アリ退出後來邸ヲ乞ヒタルモノナリ

大坂行彌明日ハ御發程相成候切彼是御咄も申上置度候付今日御退出ハ御來貴奉待候此旨早々拜首

十一月五日

利通

吉井君

一七八四 吉井友實への書翰十一月十三日

(大久保家藏)

【按】張旭書帖ノ借用ヲ乞ヒタルモノナリ

張旭之一卷鳥渡御借用被下度奉願候少々習らひ見申度御坐候決而可やくハ不申上候此旨早々頓首

十一月十三日

一藏

幸輔様

貴下

一七八五 吉井友實への書翰十二月十六日

(大久保家藏)

【按】金子ヲ融通シタルモノナリ

當分去御困りも可有之与拜察候付持合候金子差上候決而御酌酌ニハ及不申候間必御受用被下候様奉萬祈候乍失敬艸々拜首

十二月十六日

利通

友實老臺下

一七八六 吉井友實への書翰 十四日

(大久保家藏)

【按】前日不参ヲ謝シ猶ホ依頼スル所アリタルモノナリ

昨日参上可仕山々相考候へ共段々客來等有之其儀不相叶遺憾ニ御坐候雅物滞留ニ候ハ、今日二字後此方へ御遣被下度此旨早々頓首

十四日

大久保

吉井兄

一七八七 西郷從道への書翰 七月三日

【按】吉田清成へ前約アリテ遅刻ノ旨ヲ答へタルモノナリ

拜見吉田已二ニ無據約束致置候付爲相濟次第参昇可仕候少々遅刻可相成候へま御待居可被下候早々頓首

七月三日

大久保

西郷様

一七八八 前島密への書翰 二月廿七日

(前島男爵家藏)

【按】三ヶ條ノ見込上申ノコトヲ通シタルモノナリ

三ヶ條も凡見込ニ而同時差出候方可然与之事候付其都合ニ御取計近日中上申致度候尤大藏卿協議之上三文字書入差出候而宜与之事候ニ付左様御承知有之度此旨艸々如此候也

二月廿七日

利通

前島少輔殿

一七八九 五代友厚への書翰 四月十七日

(大久保家藏)

【按】築地五代邸ノ碁會ノ招待ニ對シ答へタルモノナリ

御庭前之花一入盛之由今日三四時比よ可成参堂可仕候伊藤も相伴可申候日下部ハ步行相調兼候趣ニ候此旨艸々拜首

四月十七日

利通

五代 君

一七九〇 五代友厚への書翰 六月廿二日

(大久保家藏)

【按】前日廻送セシ書ノ取替ヘヲ乞ヒ且ツ圍碁戦ニ戯レタルモノナリ

昨日差上候一冊間違よて更ニ爲持上候ニ付御繰替可被下候甚以疎漏御免所仰候此旨早々拜首

六月廿二日

利通

松陰高臺下

猶々御鬱憤嚙々と親察仕候乍去一勝一敗是武門之事ニ候付必御弱リ不被成候様具ニ祈念候何も後刻御面接御望ニ依るゑ御争可申上候也

一七九一 五代友厚への書翰 六月廿五日

(大久保家藏)

【按】速水堅曹ノコトニ付キ答書シ猶ホ烏鷺ヲ闘ハスヘキコトニ及ヒタルノナリ

朶雲敬讀扱速水云々之事承知右々過日より御咄申上候趣有之候處打過居候ニ付猶御面談之上可申上候後刻々拜趨可仕例之御(不明)上奉畏候間兎も角實力相顯シ候上勝劣ハ相分可申候穴賢

六月廿五日

甲東

松陰高臺下

一七九二 五代友厚への書翰 十二月廿三日

(大久保家藏)

【按】圍碁戦ヲ挑ミ來邸ノ時刻ヲ通シタルモノナリ

益御多福奉欣賀候扱今日亥自ら御一撃有之事与御待設いたし候然るに十二時ノ内務官員入來之筈凡四時頃ニテ相濟申候付同刻比より御出馬被下候様奉願候此旨艸々奉得御意候拜白

十二月廿三日

利通

五代君

一七九三 得能良介への書翰 四月十三日

(大久保家藏)

【按】明日碁會招待ヲ受ケタルニ付キ答書シタルモノナリ

拜讀明日々差支有之明後日ハ三字頃ハ差支無御坐候付出頭可仕候此旨
拜復まで艸々拜首

四月十三日

利通

得能様

一七九四 得能良介への書翰 四月十四日

(大久保家藏)

【按】碁會出席ヲ約シタルモ都合アリテ延期ヲ希望シタルモノ

ナリ

猶御安靜奉賀候扱明日參堂可仕御約束申上置候處無據云々致出來乍殘念
難罷出候ニ付何卒廿日後ニ御延引被下度五代寺島ハ小子ハ形行通知可
致候折角之御催ヲ御氣之毒ニ候得共不得止次第ニテ何も拜表可致陳述候
此段御斷申上度艸々如此御坐候頓首

四月十四日

利通

得能尊臺下

一七九五 得能良介への書翰 五月廿六日

(大久保家藏)

【按】通路云々ノコトニ付キ答書シタルモノナリ

裏書御免 (來翰ノ裏面ニ認ム)

拜見通路云々之事委曲承知仕候報知之上逆も六畝舖候ハ、ゆゑし方有御
坐ましく奉存候今晚ハ岩君へも色々用向も有之候付參リ可申候晚迄ニハ
報知之者罷歸候半彼方へ御知被下度奉願候懸之事ハ大ニ間違之事も有

之候付委細御糺シ可被下候明朝早日出勤之事ハ奉畏候此旨御答即刻(五月廿六日)

(得能宛)

一七九六 得能良介への書翰 五月

(大久保家藏)

【按】來郎ヲ乞ヒタルモノナリ

裏書御免 (來翰ノ裏面ニ認ム)

此裏拜見別番落手仕候明日 御出旁ニ付御示談申上置度候付今晚御閑暇ニ候ハ、鳥渡御入來被下候得ハ別ニ仕合御坐候此旨乍序御願申上候即刻(五月)

(得能宛)

一七九七 得能良介への書翰 八月十九日

(大久保家藏)

【按】吉田清藏へ交渉ノコトヲ依頼シタルモノナリ

猶御安固奉賀候扱先日粗御咄申上候御近隣吉田清藏事近日中家内引越ニ赴任之趣承申候就テ夫小生ハ相談仕候亦も宜ク候得共返テ遠慮も可有之候付甚乍御面働老兄よ御試ミ被下候得夫別ニ仕合御坐候此旨乍自由以寸楮御願申上候拜具

八月十九日

猶々十八日方ハ出發与可申事故可成速ニ御懸合被下度奉願候也

(得能宛)

一七九八 得能良介への書翰 十二月廿七日

(大久保家藏)

【按】不用ノ獵銃ハ五代希望ナル旨ヲ通シタルモノナリ

猶御安固奉敬賀候扱過日御咄有之候獵銃五代へ相咄候處誰ソ所望之人可有之候故一見可致トノ事ニ候未外ニ御遣無之候由同人方へ御持セ被成マ

シクヤ多分同人可求置候積ト被察候此旨艸々拜首

十二月廿七日

利通

得能賢臺下

一七九九 得能良介への書翰 廿六日

(大久保家藏)

【按】得能ト馬上遠乗ヲ試ミントシテ乗馬ノコトニ付キ答ヘタ

ルモノナリ

拜見今日ハ云々被仰聞承知仕候馬差支ニ御歩行之由甚御迷惑ト奉存候
内田拜借馬モ有之二正位ハ御心配エ出来不申候や何卒相并ラヘ申度事ニ
御坐候何レ晝時分ニ相成可申候間御働見可被下候此旨早々拜具

廿六日

追る別番儘ニ落手仕候

良介様

一藏

一八〇〇 中井弘への書翰 四月十三日

(京都博物館藏)

【按】出遊ニ付キ答書シタルモノナリ

貴墨敬讀本日ハ雨天故乍残念取止申候明日必ラス出張イタシ候付十字
頃ヨリ此方へ御立寄被下度事宜ニ依來客之爲妨害ヲ受候モ難圖候付御援
兵相願度候此旨御答草々如此候也

四月十三日

利通

中井様

一八〇一 中井弘への書翰 四月十六日

(守田勘彌氏藏)

【按】水戸邸書畫閱覽ノコトニ付キ打合セタルモノナリ

御安祥奉賀候陳ハ水戸邸書畫一覽之事今日山口へ引合候處來ル十八日ニ
同人彼邸へ參待受可致与之事ニ付同日午後第二字頃よ与申入置候間左

様御承知被成度此段草々御通知ニ及候也

四月十六日

甲 東

櫻 洲 雅 丈

一八〇二 中井弘への書翰 五月廿七日

(京都博物館蔵)

【按】寺島ヨリ「カラス」到來ノ旨ヲ報セシ書ニ答へ且ツ戯レタルモノナリ

拜讀過刻ハ御出被下候由外客中ニ在空舖御歸リノ由残念之至ニ候扱過日御咄ノカラス寺島ヨリ參候由仕合之至尙一覽ノ上何分可申上候此旨拜復ノミ早々頓首

五月廿七日

利 通

中 井 君

尙々所勞中外出不相調込入候夫迄ハ參上難致候間快方次第可相伺珊

珊瑚置物ハ無双ノ珍器漫ニ他見ヲ禁候況乎眞偽モ難辨粗品ト比肩セラレ候ハ瑕瑾ト相成候付乍不本意御斷申上候也

一八〇三 中井弘への書翰 七月十四日

(京都博物館蔵)

【按】約束ノ傘ヲ送り來リシヲ謝シタルモノナリ

拜讀御約束之傘爲御持被下難有御禮申上候宇内無双卷煙草ハ乍些少差上候貿易品ハ先傘ニテ御用捨可申上候餘ハ面上御答早々頓首

七月十四日

追テ休日ニ又何方ヘカ御案内可申上候也

中 井 様

大 久 保

一八〇四 中井弘への書翰 十二月九日

(京都博物館蔵)

【按】五代ト碁會ノコトヲ報シ來邸ヲ促シタルモノナリ

拜讀今日ハ高輪ハ止メニ此方ニ松陰取會ノ筈ニ付御援合可有之候必
勝ハ掌中ノモノニ候此旨貴答艸々拜白

十二月九日

利通

櫻洲雅丈

一八〇五 川路利良への書翰 二月四日

(川路利恭氏藏)

【按】勝ノコトニ付キ打合セタルモノナリ

昨日致承知候勝云々ノ一條内閣ニ而内々相咄置候然處同人義ハ勅任已上
重職ヲ奉シ、モノニ而止ムコトナレハ無致方候得共可成公然不相成方可
然トノ説モ有之候付其段ハ大警視ニモ注意イタシ同人必ラス事ヲ左右ニ
托シ候ニハ無相違候付飽迄偽ラセ候モ宜ク候付其マ、ニ而聞取ノ手順
ヲ盡クス而已ト申居候付決シテ差支無之ト相答置候仍而猶御呼出ニモ相
成候ハ、其人モ御調ノ上能々爲相合御着手有之候様イタシ度此旨爲念申

進置候也

二月四日

利通

川路殿

一八〇六 大山巖への書翰 二月十五日

(大久保家藏)

【按】本城内云々ニ付キ答書シタルモノナリ

敬讀 陳夫本城内云々の義ニ付承知仕候處當分巡查ノ關係ハ無之と存候
へ共今日早速取調其通ニ候へハ警視局へ相達候様可仕候最も今日午後ニ
テモ御出相成候やサ候へハ誰々ノ人數ト御知セ可被下候今日ニ候へハ小
生モ仕合ニ候此旨御答早々拜首

二月十五日

利通

大山君

一八〇七 岸良兼養への書翰 六月五日

(岸良家藏)

【按】舊佐土原藩家老樺山舍人ノ檢事任用ニ付キ依頼シタルモノナリ

愈御安祥奉拜賀候扱樺山舍人此内よて仕官内願承居候得共差當相當之場所も無之其ま、打過居候處此頃猶又節々承申候就る此度檢事之方も段々進退も可有之存候付若御都合出來候ハ、九八等之處に御入置被下候得ハ仕合ニ御坐候御承知之通唯純良ある人物よて迎も事務上ニハこより兼申候付此前檢事之方ニ奉務も致居候段承候間此旨御頼申上候猶御勘考ヲ以御取計可被下候早々拜首

六月五日

利通

兼 養 様

一八〇八 重野安繹への書翰 正月廿五日

(大久保家藏)

【按】伊地知貞馨ヨリノ來書ヲ送リタルモノナリ
益御清康奉賀候陳々伊地知よて別紙之通申來候兼承居候御噂之次第も有之一寸御尋申上候御用も有之被差遣事ニ候得ハ御申立無之を相運兼可申候此旨艸々如此候也

一月廿五日

利通

重 野 賢 臺

一八〇九 重野安繹への書翰 二月五日

(大久保家藏)

【按】明日退出後來邸ヲ乞ヒタルモノナリ

益御安固奉賀候陳々御面働之至候得共御願申上度義有之候付明朝八時方九時迄之間又ハ午後御退出よてニ亦も一寸御立寄被下候得共別を仕合ニ御坐候此旨乍自由艸々如此候拜白

二月五日

利通

重野老臺

一八一〇 重野安繹への書翰 二月十一日

(大久保家藏)

【按】高輪別邸ニ碁會ヲ約セシニ都合アリテ本邸へ來訪ヲ通シタルモノナリ

今日高輪別寓ニ等ニ申上置候處都合有之本亭ニ方ニ致候間御都合次第何時方ニ亦も御出懸有之度此旨早々如此ニ候也

二月十一日

利通

安繹老臺下

一八一〇 重野安繹への書翰 三月廿五日

(大久保家藏)

【按】園碁ノ爲メ來邸ヲ誘ヒタルモノナリ

愈御安固奉賀候扱今日御差支無之候ハ、午後三時よ御入來被下度御願

申上候此旨艸々拜首

三月廿五日

利通

重野様

一八一〇 重野安繹への書翰 四月廿九日

(大久保家藏)

【按】歴史掛ノ件ニ付キ書類ノ提出ヲ促シタルモノナリ

過日來承居候歴史課掛云々之事書面差出有之候上御評議可有之付御差出有之様致度此段早々申進候也

四月廿九日

利通

重野安繹殿

一八一三 重野安繹への書翰 十月廿一日

(大久保家藏)

【按】町田久成邸ニ於ケル園碁ニ勸誘シタルモノナリ

其後御安康奉敬賀候然ハ今日町田氏ハ參候間御閑暇ニ候ハ、三字比ハ御出懸被成ましくや寛々一戰相願度尤鷹女召列申候此旨早々頓首

十月廿一日

猶御承知ニ可有之候得共町田氏居所ニ西大久保松平右近將監元邸ニ
亦候也

重野老臺下

利通

一八一四 重野安繹への書翰十二月十二日

(大久保家藏)

【按】珍品ノ贈物ヲ謝シ猶ホ明日ノ園基ニ來邸ヲ勸誘シタルモノナリ

朶雲拜見昨日ハ參昇面白事ニ御坐候然ハ何寄ニ珍品御送被下難有御禮申上候明日ハ吉原打續爲致度候付早目ハ參候様御傳被下度外ニ大与中村ハ吹聴可被下候小子ニハ晝迄ハ御用有之候へ共何も差構不申ニ付先生ヨも

御閑暇ニ候ハ、御來杖可被下候此段早々得貴意候頓首

十二月十二日

大久保利通

重野厚之丞様

一八一五 重野安繹への書翰十六日

(大久保家藏)

【按】園基ノ爲メ來邸ヲ勸誘シタルモノナリ

丸山過刻ハ御待申上居候御用も可被爲在候得共休日ヨも候間早速御來貴奉待候也

十六日

大久保

重野様

一八一六 石井省一郎への書翰三月三日

(石井省一郎氏藏)

【按】軸物ノ寄贈ヲ謝シ依頼ノ揮毫ヲ贈リタルモノナリ

益御安固奉賀候陳去過日去半(欠)之一軸御送與被下別亦出來も宜辱致厚謝候御頼之拙筆相去々め甚汗顔ニ候得共折角之御所望ニ付差上候外ニ一葉相添進呈候ニ付御笑納相願候此旨艸々拜具

三月三日

利通

石井殿

一八一七 金井之恭への書翰 六月九日

(金井四郎氏藏)

【按】書類ノ廻送ヲ促シタルモノナリ

唯今御答書之趣致承知候一通寫方相濟候ハ、直様御廻有之度佐々木方ハ跡ニ相成候亦宜キ義ニ有之候條公御下命之由ニ去候得共御用取調ニ付差急候付此旨申遣候猶條公ハ拙者よ可申上候也

六月九日

利通

金井殿

一八一八 宮里新一郎への書翰 八月七日

【按】前立物鏡文字ノ認メ方ニ付キ依頼シタルモノナリ

宮里新一郎様當詞

大久保一藏

御出勤奉賀候扱此内御願申上置候前立物鏡文字別紙ニ相認差上候間宜鋪奉願候此旨乍略義以書中早々拜具

八月七日

一八一九 東京府知事參事への書翰 二月廿四日

【按】英國公使三條公邸へ參向ノコトニ付キ答書シタルモノナリ

唯今英國公使三條殿に推參之趣御懸合奉承知候則條公邸に參上可致此旨御答早々申進候也

二月廿四日

大久保參議

東京府知事殿

參事殿

一八二〇 石原近義への書翰 三月十二日

(天久保家藏)

【按】大島へ支廳設置ノ件ニ付キ答書シタルモノナリ

致敬讀候大島の支廳被設候等伺之通官員出張且五萬圓検査費之事未手順
取究候義ニ無御坐候昨日御咄申上候處ニ粗御内定有之迄之事ニ極内輪
之御咄ニ付左様御承知可被下候尤縣廳かとへ御申越候義先御見合可被
成猶委曲之御直ニ可申上候御答早々拜首

三月十二日

利通

石原様

一八二一 石原直右衛門正右衛門への書翰 九月十九日 (島津家文書)

愈御安康被成御坐奉恐悅候隨る小生無異御供奉仕候付乍憚御休慮可被下
候扱御願申上候拜借一條先ッ八十位ノ處よて御世話被下度喜三いも其段
申越候付宜舖御談合被下度二十丈と來月々末便よりさし登セ之御都合被
成下度左候得ま今般御取替被成下候十金ハ右之内より御請取被下候様御
願申上候粗承置候二十金丈とハ藏方よて御都合出來候段老父へも申越置
候ニ付追々御遣被下候様奉願候何扁宜舖御心添可被下候御親父様へ御逢
申上候賦御坐候處外出跡ニ御出被下候由御見舞申上度候得共明朝七ッ半
ニハ御出立私ニハ正七ッ時ニハ不打立候る不相濟彼是取込其儀不相叶殘
念奉存候御元氣ハ相違無之候間御安心可被成候細事申上度候得共前條通
よて得不申上候亂筆御免可被下候自ら着之上御禮可申上先ハ右御用伺迄
早々頓首

九月十九日

一藏

直右衛門様

【解説】書中喜三ハ喜三左衛門ニシテ税所篤ナリ

大久保利通文書卷四十八(甲東詩歌集)

從來甲東詩歌ニシテ轉寫ノ間
往々誤リ傳ヘラレシモ
本卷努メリテ之レヲ正シ以テ定
本タラシム

月照和尚四十九日の忌日に當り吉祥院に於て

同志と共に心をかりの法事を營めるとき詠る(安政五年十二月三十日)

手向する法のむしろの諸人を君とひとしく身をかへりみす

題まらぬ

君り名をたまとみかきし夏草乃露の御めくみふかくもあるる花

殘花 (文久二年四月朔日)

咲出て、時をまらはに散る花の色あそ道のまもりなりけれ

咲いて、ちり行く花をなかく、にときをほらはぬ色香ならずや

仰とかうむりて難波に赴る舟中よて(同年四月二日)

君のため碎くよ、は荒磯の岩間にあたる浪をものかは

遙に八嶋壇之浦を後に見なし頗る感懐あり(同四年四月四日)
天の下春を占めたる花にしてやゝて矢しまの秋の夜乃月

此日赤穂の城を遙に見て

此城の根に居りたる大石の動ぬ道を世にてらするあ

明石へかゝり一の谷前を過き(同年四月五日)

千代を経しみとり松原一の谷魁けし名のいろそへになる

順聖院様七回御忌御追善

秋懐舊(元治元年七月二十日)

ほくくくと聞けは夕への蟲の音もほきとそありを鳴ぬ聲の取
見せさせを神をなるとの夕立に雲ふちめくる淡路しま山

加茂川のほくみをゆくと見し夢のさめしまくらになく千鳥かあ

故郷冬月

おゝほならてさゆる影とも見へぬ哉ふけ果てたゞしふるさとの月

不二山

まら雪の残りてしるゝ大空のみとりにお取しふしのまら山

山階宮の御殿に召され難有き仰言かゝふりはた御志のほとを

も親しく伺ひ奉りて感激のあまり窃にかくちうたへる(元治元年)

久方の雲井にたかくひくくなり群ををはなれし芦田鶴の聲

虫たにもめくみの露よなをかれて草葉をけいておのり音を鳴く

御手洗の湊にて(慶應元年四月三日)

ねさめして夢の行方をたとる間に月も波間にかすみなるあ

初花

立初めし霞も今をみよしのゝ花の匂ひとなりになるかあ

宇治にもものして千鳥の鳴きけれり

いとゝ我ぬる夜も知らぬ宇治川の波立かへり千鳥啼くあり

明ヶのあした雪ふりぬれば

明也たる朝日の山乃雲間より散りかふ花は春のあはゆき

何となく春の々しきおもえろし

立るへり宇治の川浪寒けれと春を雪にも埋をさりなほ

女の戯れ行くを見て

春風にみたせて見ゆる少女子の裳すそも花よまらふ頃かあ

嵐山にもものして

此の春もあらしの山の花陰にうゐるへしとは思ひかけあや

おとしのみ咲くらん花の心地してくるゝも知らて浮かをたるかあ

嵐山咲よはひたる花陰に々ふをさかざと鶯のなく

人々花むけの歌よみておくられなほは

大井川早瀬の水も立るへり我と花とをと免んとやする

夜の春雨といふ事を

淋しさのほもりし夜半の轉寢にみたれて通ふそるの雨のあ

語らひし友をかへりて春の夜乃雨をさひしきものにそありなる

花漸盛といふと哉

よしの山木の間に見へて咲く花乃雲にいつり立まらふは

寄花祝といふと哉よみて重春君の移住の御祝に奉る

咲初し御園の花に香を添て千と努のそるにきみちをむらむ

山家春興といふ事哉

けふもまゝ夕へとなりて鶯の聲さへかすむそるの山さと

故郷花

古への御代の盛りを春とにあふきてそ見る志賀の花園

春もあき御代ともまらて故郷に匂ふもあはせ山さくらにはあ

山吹

さくら花あをせてのちによしの川春をとめたる岸のやまふき

風ふるそ色や移ると見るまでに咲そるひたるやまふきのはな

都をさちるるに

散る花に契やおゐんちるとてもまふむ春に咲むと思へ
山の端にたゞはともよし春霞我をとめん關とふにかれ

折にふせたる

花の香はたもとにうとく成りぬとも人のあゝろのにやそさらめや
ためとしを思へはこそあれ君にけふあゝろにあらぬ別ををそむる

加茂川の柳を見て

さらぬたに悲しきものを加茂川の雨にゐすみしゆう月の影

題えらば

鶯のなく糸にさすり青柳の根さしそかりは見たをさるらむ
あら髪は別るゝ駒の諸手綱引とめなるも人のまふとあ
あそさると逢ふと二たつの上にしてふむへき戀の道はあり々衆

淀川舟中月を見て

散る花と都を立ちて淀川の月になかきて歸るたひの取
棹さして行くゝ見れば九重乃都の空につきかすむか衆
月影も霞ミ見たりてよと川の岸み遠くも千鳥なくなり

淀川の柳を見て

月影にまをせて見ゆる淀川のやなきの思ひ知る人や誰

難波にて

花の香乃袖に残りて都路はまふ遠らぬ心地こそすれ

松間の花といふと哉

白雲のかゝると見しゆ松の枝に咲る見したる櫻なり々り

杜新樹

きのふまで花に匂ひし衣手れ杜はみとりと成りになるあ
まのひねの忍ふの杜の郭公若葉の色に鳴くもあらなん

難波をたちる

故郷にゐへらぬものを梓弓何にひかせて立ゐへる哉
 難波江の霞を包けて行あり乃行方おかしき我あゝるる歌
 なよ波江の沖津えら浪立ゐへりかきしや袖の名残りるらん
 漕き出てかへりみやこの名残りよりたち社まさき袖のえらあま
 難波江の霞のおくはなのくくとあけゆく空のかきりありな祭
 夢たにも見んとおもひし難波江のあけゆく春の明方のそら

嵐山にて

あゝの春も見んと契りし甲斐ありて花さへあゝる有世之けり

伊豫の國た島といへる湊にとまりて

ぬよち取るたしまの沖による波のおとそかりこそ友となりなを
 夜もそゝらゆめも結そぬとより寝の枕にまけく雨さへそふる

三机湊にとまりて

幾山の隔てゝる夜の夢なれぬ都ふるさと行へまらなま

佐賀の關よとまりぬるに春もそや名残りなれぬ

筑紫取る佐賀の關守心あらぬ春の行方をまそしとゝめよ

鹿兒島發足の折(慶應元年五月廿一日)

今とて出をはさまり旅衣濡をぬもりの我なみたる歌

伊集院にとまりて

故郷に包つりひと夜ををたつと夢ならまして見るよしもかか

黒崎へ着き郭公の啼くを聞て(同年五月二十七日)

幾里かゑたて來ぬと郭公の包らぬ聲にふも鳴くなり

なれもまた旅ねの床やうりるらん空にみたをてなくほとゝ幾に

旅の曉のあゝるを

あし曳乃遠山里の鳥ゐねを聞つゝ今朝もたち出にけ祭

夜半の寝さめに

夢路とゐなしゐねらぬ草枕さめてはさしき故さとのやま

述懷非一といふとを

吳竹の我り世の上をかそふを嬉しきぬしはすくなかり
不言戀といふとを

くれ竹の世に言の葉の甲斐あらぬそやくも人にいはましものを
なほくくに深き色取る岩つゝしいそぬ思ひをひとは知らそや

被妨戀

逢見んとたのみしものを玉章の道さへいまの絶へぬとそ思ふ
久方の月にあらねと我戀の雲の晴を間をまちや見たらむ

夏月(慶應元年閏五月四日)

さも社はなつの霜ともいふるを更け行く空の月のまゝしさ
月影のまゝくき夏の宵くをのみ糸をやあゝぬるる取

若竹

おとしより千代の陰をや契るらむ茂りあひゆるやとのまゝ竹

いつの間に陰さげ程に成にむ月にはさはるまとのわる竹

竹風夜涼

吳竹の林にそよく風の音に夕へ涼しく成にけるか

竹の葉のなひくほさりの涼しきは宵々か勢のやとる取るる

曉水鶏

ありほろの月を見よとる柴の戸をとくも水鶏のおとけをにけむ

我門乃小田の朝霧浅からぬく水鶏もあらさらましを

夜橘薫袖

さみされに朽なんとする袖の上にあや取く匂ふ軒のたちそ

ぬねあてに聞の戸あくる袖の上に花たちそあ匂ふ夜半あ

うつり香のれあらし袖とおもひし花たちそあ匂ふなり

思不言戀

おもひのみほもりくいていたつらにいはてすき行く月日取るあ

松下初涼

さしのほる月も梢にあらはせて夕へ涼しき松の下あけ

扁舟暮歸

夕なふり幽かに見ゆる須磨の浦にとまやをさしてあへる釣舟

桃岡 六月月次會

水風涼

ひるし山木の間の月をさそひきてましく見ゆる加茂の川かた
澄とありやさるの影もみよをたまた江を記たる風のすしき
水上に秋や立らぬ大なる河入江を記たるあけのすしき

當座 晩夏雨

軒端もるしつくの音にみゆる哉秋もと取りのゆう立の雨

軒ちやく秋立ぬらむあちしてもりくるあめも淋しありけ奈

點取兼題 池蓮

ものいそゝこたへやまらむ少女子のまよふのいけのそな蓮あか
いけの面にさなる蓮の花見れぬ我りこゝろさへ濁らさりなり

顯戀

かくも世にあらむれむたる我戀の忍ひもあへぬまこと取るぬ
まのひつゝ結ひしものを戀草のいつしか色にあらむれにらむ

浦鶴

よる浪のさむきの上にきこゆなり長居の浦のあしぬ海の声
大君の千代をまらむてわの浦のあしまにうさふ田鶴のゆさな

水無月十五六日頃月くもりなる夜むら室町なるたひやとりよ

て少女子琴をまらむるにほとなく月を記さむければ

大空に琴のまらむやひくぬ雲もやふせていつる月あか

難波橋にすゝみにもものして

難波江の夕へのあせにみそきしてくれ行な海のをしくも有るかか

夢中戀といふと汝

たのみつゝきみもや今宵寝つら舞むをふまことわたりまことなる
折にふせて

露ふるき袖の上にしてる月のそかなき影となりになるる暇

都早秋

雲の上に今朝遙にも立ぬら舞おとそありなる秋のはつゝる勢

月前萩

萩の葉の音さやゐにもてる月はあゝろ乃うこくそしめあるる舞

八月八日山口利雄本田親雄井上長秋と會してよめる

華洛月

陰もなき御代の光りもみゆるかか大内やまの秋の夜の月

秋の夜のいつくちあせと九重の雲井の月を見るるるありなる

當座 幽栖月

住甲斐のある世取るか奇柴の戸に宵くゝあよふ秋の夜のつき
秋たての我りままひさへてる月の光りたゐくもす舞こゝろあ
搗衣

題まらば

いつくまでおもひをやりて誰り妻の秋の夜ふるくころもうつらむ

高崎五郎右衛門十七回忌 (慶應三年十二月三日)

ときによりちしやの浪もたゝせすは濁り果てたる御世は澄むまし
君しのふたもとにあゝるまら雪はなみたの露のこほるなるら舞
きみか名のかくせぬあとはしら雪の上にもいまは見ゆるありけ祭

暮春鶯

うくひすの聲さるかにもなりにけり春の行方をたつねてやあ

春雪

ひまもなくふりかゝれとも青柳のいとにたまらぬさるの雪かあ

子 日

君り代の千世を手にとる心地して子日の小松曳そうせき

雨中花

うちかすむ花の上なる春雨はそれぬさきよりのとけかりぬる

明治元年十二月八日供奉の仰蒙りて東京を立たる時

武蔵野に消へ残りても露の身のたちあるるとはおもはさりしに

吉原に御休ミの際富峯の眺望絶言語(同月十一日)

大君の行幸たにある代にあひて富士の根さへも動くなるら森

濱松御泊彼是と思ひつゝ(同月十四日)

大君の御馬の塵の數に入りて富士を見むとは思ひかけきや

明治二年八月九日濱御殿に於て 御前酒肴被下

且秋衣の御題を賜ふ

かきりなき恵みの露を唐衣かけて幾世の秋をかさねむ

明治二年十二月二十九日大坂へ向ヶ京都出立別宴に岩下子鎌

田子新納子送別の歌に返しの心にて

西の海の波乃上より立そめて世は長閑よも春の來ぬ森

明治四年五月十三日山口阿部氏邸涼雨一過庭前老松一首を侍

らぬ

涼しさを軒端のまつに残しおきてひとむら過くる夕たちのあめ

明治六年八月泉州高師の濱を過ぎ名所の松を伐りたふしける

を見て税所縣令に贈る

おとに聞く高師の濱のこま松も世の仇なみはのゝをさりぬ

明治七年四月佐賀の亂平らきて後數日佐賀市杉本某宅に梅花

を観る

よろこひのいろこそ見ゆを君り家の軒端に匂ふむ先のそあゐな

早 梅

いつの間に軒のまつくの音絶へて咲出に々舞むめのまつはな

皇居和歌當座被召参昇月前郭公の題を得たり

山の端にさしゐる月の影のうちに聲さるかにもなくやとゝきは

明治九年四月十九日霞ヶ關の臨幸の榮に感してよめる

ためしなき君の行幸を我園のまつの梢にかけて空れしき

大御手にふせしさくらのひともとは千代まで花の香をとゝむる

惜しからぬ玉の緒のなからるて甲斐ある御代に逢てけるか

明治九年五月二荒神社にて短冊に認めよと望まれぬ

世に知らぬ二荒の奥の湖に御代の影さへうつる今日か

題まらば

雲に乃かり海にひそむも時ありて龍の動きのやすくもあるか

雨風におのり命をまかせつゝまかはぬいろに咲く櫻をか

花ちらはふたゝひとはぬ世の人をおろありとも思ひぬるか

松島にいたりて

人間はいるゝ語らん言の葉のおよそぬ松の千鳥なり々

明治十一年新年御題 鶯入新年語

君り世の千代を壽ふく鶯の初音のとけき朝をらけるか

○

新納立夫亡妻利通姉仲子一周忌即成

一歳纔過既舊時 涙沾双袖不堪思 去年今夜但如夢 君向病床祈快期

右弘化四年五月十二日新納立夫日記中ニ記載セルモノナリ同日

記ニ曰ク「夕方ヨリ大久保正助來リ終夜懷舊ノ談話綿々タリ正助

詩ヲ作ルツたなくとも年弱ト云ヒ即席故無論」

讀義臣傳 (青年時代ノ作)

復仇忍生忠倍精 赤城軟血約同盟 四十餘人金石黨 處死如歸節彌清

閑庭草花

閑庭秋欲夕 籬畔菊花疎 不管人蹤絕 晚香猶有餘

蟲聲非一

窓燭影明滅 愁人猶未眠 閑蟲長短語 斷續滿庭前

月前遠情

皎々秋天月 清光千里寒 今宵異鄉客 滿袖露團々

右五言三詩ハ慶應三年春久光公賜題ニヨリ西郷隆盛ト共ニ賦シ

テ公ニ呈セシモノニテ公ノ親ツカラ添削ヲ加ヘタル原書今猶ホ

西郷家ニ藏ス

王政維新之年下淀川

爲客京城感慨多 孤蓬此夕意如何 水關不鎖鷓鴣眠 穩十里長江載夢過

明治元年三月送西郷參謀從軍赴關東

錦旗雲幕舞春風 威德竝敷東海東 先識勳名蒙六合 凱歌歸奏紫宸宮

偶成

海鳴山動雁行狂 朝作風雲夕雪霜 誰識寒威嚴肅日 鳳凰闕下帶春光

戊辰作

陞辭千里向關東 獨拜天顏恩賜洪 一死難酬臣職重 鞠躬願致太平功

偶成

鳳闕煙橫日欲昏 上林空聽鳥聲喧 孤懷元抱回天志 敢解衣冠掛府門

明治三年歲旦

烟擁江城曙色開 春芳占得一庭梅 宦游今歲亦離闕 遙拜東方舉壽杯

同年一月十四日山口木戶氏新宅賦一詩呈主人

風流本自屬君堂 名嶺入窓水繞廊 誰識幽情此中味 老梅花上月痕香

同年二月廿五日臨發鹿兒島留別

滿城春色落花香 嬌々鶯聲對夕陽 多少別魂誰得識 風前楊柳萬條長

長崎滯留卽吟示數子

酒滿高樓顏色新桃紅李白十分春浮萍相合心如水平已欲夕陽興味真

偶作

春深連日雨紛紛半嶺欲晴半嶺雲一睡醒來猶未暮故山何處望難分

同上

黃鳥曉來和雨啼落花點點委新泥濕雲晴處半峯顯古寺依山麥隴青

同月九日到神戶布引亭榮女出相接庭前櫻梨花如雪戲賦與榮女

東風未和播州灘雲影離々春尚寒幾樹櫻梨三尺雪清香馥郁玉欄干

船中戲作

舟上偶然夢又長白雲蒼海望茫茫醉餘戲喫香柚子忽憶瓊江紅砂糖

示得能子催一笑紅糖之事大有故也

明治三年十二月二日登淀川風景依々交有感

寒氣侵衣雨亂飛天王山色望依々誰知一夜蓬窓夢漫向江流語是非

見東山有感

曉發伏城入洛陽孤筇踏破滿塘霜此間有嘆君知否重見東山黛色光

送八田翁歸京

嘗期後會杳無期何料重逢共一卮却恨墨江江上月清光此夜照離思

偶成

迂生未有尺寸功叨辱朝恩禁闕中早晚尋賢成夙志深山何處訪英雄

客中偶成

辭京千里向家鄉一夜孤舟客恨長夢到墨江煙雨影尋花追蝶步回塘

偶成

日暖烟輕柳影長玉樓盛宴醉金觴東山一夜名花色萬客應通夢裏香

偶成

黃鸝啼破柳烟深桃李滿開花影陰麗景偏憐春日晚一眸觸處入清吟

偶成

爐上無塵靜烹湯一枝春暖瓶梅香詩成棋罷如何興月落西窗清話長

癸酉初秋游于堺濱

身寄浮雲百事非，十年難遇^{（欠）}佳期。同游賞得堺濱夕，正是秋風明月時。

於橫濱偶作

曾遊屈指十餘年，乾轉坤旋幾變遷。此夕感情誰得識，月明空照舊山川。

偶成

輕袖春深趁暖風，青山綠水曳吟筇。行々最愛孤村外，宛轉鶯聲弄晚紅。

客舍書懷

數行鳴雁夜飛霜，關路秋風引恨長。誰識數行孤客淚，一塊別有胸中橫。

秋日郊行

霜落天高雁影長，暮雲秋色望蒼々。閑行野徑詠歸處，月掛峯頭影半藏。

十三夜賞月

秋色晴來劃海天，賞吟不覺漏聲傳。月光雖欠二分影，清氣勝於三五圓。

季秋別 和歌題

滿城風雨近重陽，一曲離歌別恨長。料得關山千里路，裁將錦繡滿詩囊。
霖雨全收月色明，又聞新雁兩三聲。客衣露濕秋將半，添得愁人幾許情。

下通州偶成

奉勅單航向北京，黑烟堆裏蹴波行。和成忽下通州水，閑臥篷窓夢自平。

偶感

國運元有興隆期，偉業十年終不違。自是隣交期永遠，更將內治護皇基。

過廈門偶成

秋色長天望裏清，一灣綠遶廈門城。樹蟠石秀多風趣，造化奇工畫不成。

臺灣石門堡上偶成

王師一到服頑兇，戰克三千兵氣雄。請看皇威覃異域，石門堡上旭旗風。

龜山營中偶成

大海波鳴月照營，誰知萬里遠征情。孤眠未結還家夢，遙聽中宵喇叭聲。

乙亥冬日圍棋偶作兼送松陰君^{（明治八年）}

寒燈挑盡夜沈々 雪敲閑窻和棋音 誰識局中存妙趣 爭心元是屬無心

明治九年五月二十日先發日光山偶成（登二荒山）

行盡岩曉幾數仞 人蹤斷處路難分 前山晴去後山雨 千態萬容脚底雲

登白河城

烈風亂雨暗雲烟 東海波濤勢迫天 欲見孤城成敗跡 煌々白日照無邊

下最上川

雨餘新綠碧連天 曉發孤舟大石田 屈曲水流行相望 何人妙筆畫山川

同上

千章夏木雨痕鮮 一棹孤舟下大川 屈曲清流奇絕處 米家水墨是天然

羽州途上偶成

芒鞋到處路崔嵬 綠水青山相伴來 千尺紅塵都拂盡 滿衣染得翠嵐堆

明治丁丑送岩村通俊君赴任鹿兒島縣

陶然把酒送君行 何惜東西離別情 應識維新業初就 皇威敷得鶴山城

大久保利通日記補遺

嘉永元年利通日記ニ就テ

去ル大正十年利武歸縣シ市來川上ナル大久保家祖先ノ墓參ニ赴キシ際同地分家ニ藏セル
「弘化五年正月改公用書付諸覺帳」ナルモノヲ發見セリ内容ヲ檢スルニ大久保家中宿ニ關ス
ル藩廳ヘノ願書等ノ控ヘ書キニシテ多クハ利通ノ自筆ニ係リ城下ニ於テ名代届出セシ書
類ナリ然ルニ右覺帳用紙ノ裏面ニ細字ノ認メアルニ心付キ之レヲ解キ披キタルニ料ラサ
リキ利通ノ日記ニシテ嘉永元年正月元日ヨリ二月十一日ニ至ル四十日間次ニ同年六月朔
日ヨリ同晦日ニ至ルモノ同年十月朔日ヨリ同晦日ニ至ルモノ及ヒ十一月十日ヨリ同晦日
ニ至ルモノ等前後百餘日間ノ記事ナリキ當時祖父次右衛門ハ琉球館附役在職時代ナリシ
カハ大久保家ハ加治屋町ヨリ移リテ館内役宅ニ居住セリ日記中官内又ハ官中トアルハコ
ノ事ヲ云フ利通ハ十九歳御記録所勤務中ニシテ是年一月十三日御家譜編集書役ヲ命セラ
レシカ一月十九日藩學助教横山安容ノ門ニ入り更ニ同年六月九日洋式砲術ヲ成田正右衛
門ニ學ヒシコト等ハ日記ニ依リテ始メテ知ラル、ナリ即チ他日利通カ新日本建設ノ大事
業ヲ雙肩ニ擔フテ立ツヘク青年時代ヲ如何ニ修養刻苦スル所アリシカ本書之レヲ語リテ
餘蘊ナキヲ以テ頭註龜頭等ヲ加ヘ茲ニ掲載スルコト、セリ但シ原書字體極メテ粗雜ニシ
テ不明ノ個所少ナカラサルヲ遺憾トス

(利武識)

大久保利通日記補遺

嘉永元年正月元日ヨリ同年二月十一日ニ至ル

正月元日

(記事前半ヲ缺ク)

是ハ嘉殿(新納)与相別拙者加治ヤ町邊汝遠近通行先札(孫左衛門(甚大))三原氏伊地知氏(彦八)(八郎)大山氏堀
右衛門(右衛門)氏ハ一刻差越又札上床氏毛利氏大重氏川畑氏兒玉氏西郷氏湊川氏(源左衛門)ハ一
刻差越阿多氏(十郎)ハ札宮内氏(藤助)屋八木氏平田氏(次兵衛)(正十郎)ハ一刻差越札帖佐氏伊地知氏
新篤氏(莊次郎)前向伊地知氏黒木氏有川氏福島氏石塚氏(牛之進)ハ一(勇右衛門)刻差越龜山氏(李大夫)ハ一
同斷河北氏同斷東郷氏鈴木氏札萩原小路長野氏ハ一刻差越湯地氏札樺山
氏ハ一刻稅所氏同斷諏訪ハ參詣大田氏ハ差越天神ハ參詣城井氏長崎氏ハ
札木場氏(傳内)山城氏土橋氏牧野氏一刻つ、差越已ニ夜入近く相成罷歸リ四ツ

菅公社參詣

日記補遺 (嘉永元年正月)

時ニ休息

同日 陰天

今日五ツ時前ニ起座未都而禮廻不相濟候付早々相仕舞朝稻氏ニ一刻夫
 〆鹽屋中道御船手の通り肝付氏小倉氏の札敷根氏一刻北原氏(半藏)日置氏一
 刻餅原氏の札友野氏河野氏一刻山口氏の暫く種子島氏税所氏の札肝付
 氏同夫〆草牟田長野氏(勘兵衛)の札圓清院強武居士の參詣肥田氏の向行候處兒
 玉氏の行合仕合ニ而同道ニ差越札差左候而歸ニ藤井氏(助一)の暫飯杯頂戴い
 〆し七ツ前ニ辭し橋口氏野崎氏の札上山寺亡姉之墓ニ參詣愁涙堪り〆く
 有し昔ならハ如何ニ歎給はんニ只墳墓ニ向て涙の外なくまこ〆くと別を
 山次越兒玉氏(喜三左衛門・篤)の一刻税所氏(税所本然)の行候處退庵老先日〆被歸居候處段々咄共有
 之緩々長座既ニ大鐘過ニ歸候處今日客人ニ而拙者又一時刻裏門邊に出候處
 四郎左衛門殿(川上)杯ハマ投有之相交一刻川上氏の可立寄甚之進不及辭直ニ差
 越歸見候處客も相開四ツ時ニ休息

姉新納なが
子ノ墓ニ詣
ツ

破魔投ケケ
遊ヒヲ試ム

三日 陰天

今日六ツ時過ニ起床早々相仕舞四時ニ城ヶ谷猪俣氏(猪右衛門)の一刻戸口迄差越左
 候而御祝儀ニ罷出候處御出座と程間有之九ツ時ニ御出座凡人數百五拾
 人計ニ而候左候而日高氏の札高麗町橋次通り日置氏(半藏)の戸口迄有馬氏の札
 有馬一郎殿の一刻夫〆田路行返天神社の參詣森山氏(與兵衛・榮園)の戸口迄田宮の參中
 村氏の札夫〆江田氏の戸口迄岸良氏札迄夫〆歸家今日迄と程天氣不勝候
 得共暖氣ニ而途中もあつき程有之最早春景茫茫武田畝のけしき勝を心氣
 長閑ニ而一入之氣をさミ相成候處夜四ツ時ニ休息

四日 陰天

今日六朝六ツ半ニ起床他出不致小座之邊少々取こばめ八ツ前牧野氏被訪
 碁打相企三番打拙者勝負マケい〆し候處夫成ニ而取止其内税所喜三左衛
 門殿被訪喜平次殿(牧野)被歸喜三左衛門殿と段々咄共い〆し左候而ハマ投相
 企川上四郎左衛門殿門番九兵衛など、屋敷前ニ而い〆し後々安愛寺前ニ

日記補遺 (嘉永元年正月)

三百五十九

破魔投ケケ
遊フ

牧野氏ト圍
碁

あもいとし大鐘近程遊ひ夜入近喜三左衛門殿去被歸今夜去九ツ時ニ休息

五日 晴天

今日去五ツ時前ニ起床他出不致段々年頭客あとの有之八ツ過官内ニハ
マ投相企夜入前迄いとし相歸候處郡山氏被來居段々御咄被居候處山口氏
御出ニ郡山氏去早々講釋有之承候四ツ時過相歸候講釋相濟方丈の差越
候様無參様被仰付皆々行段々咄有之様も來候

七日 快晴辛亥

今日去五ツ前起床四ツ時出勤四ツ時ニ六組觸役所方只今御用申來嘉兵
衛先生の願出候八ツ過ニハ相成候はん夫又御記録の罷出八ツ過退
出大鐘近に今度被仰渡高一卷可被差出候旨石神新五右衛門殿方被申渡候
付早々書認夜入近々意益殿被參居候付同道ニ意益殿去今日母上様皆吉
氏の被成御越彼方の差越候る之様相頼同道候拙者も差加罷越候處少々不
宜處有之書改明朝可差越与る之左候る今晚去南林寺講釋聞ニ新助兄与可

無參和尙ノ
法話ヲ聽ク

南林寺ニ講
釋ヲ聞ク

母病氣快癒

高一卷書ヲ
提出ス

式夜ニ得能
新助等ト會
讀ス

參由申置吉利家式夜ニ付相斷可申考ニ折角彼の向ひ千石馬場差越候處
中途ニ行合候付一刻彼方迄差越其段申分參申候半与る走り行其段申置
左候る同道ニ行候南林寺の行着候處折角初候處ニ程敷候四ツ
前ニ相濟候付同道ニ二官橋通迄同道いとし候上萩原小路迄被來候夫の
相別候間あく父上様も彼方の御出被成候四ツ過迄相咄歸候母上様少々御
不快有之候得共よろしく候

同八日 快晴壬子

今日去早目起床昨日差出書認石神氏^(新五右衛門)の爲持差遣候四ツ時ニ出勤いとし今
日去御暇いとし歸候新助兄濱田氏少々不快付差越候半と被申候付約束い
とし拙宅の問ひ被吳候様申置九ツ時被相越候處被來同道ニ差越候甚被
致歡喜七ツ前迄相咄夫の同道ニ横山氏^(安之丞)の差越積ニ差越候處留主ニ
末川氏^(久馬)前迄同道いとし拙者相歸候今晚去式夜ニ大鐘方濱田氏被參夜入
近ニ得能兄被來候六ツ前ニ會讀相濟九ツ前迄段々相咄被歸申候夜入近

日記補遺 (嘉永元年正月)

雨ふり出し候

同九日 雨天己丑

今日五ツ前ニ起床五ツ時を雨ふり出し候付春雨朦々とし不開四ツ時ニ出勤八を退出(藤井)御入來被成候付七ツ過を牧野氏に可差越与父上様被仰付拙者も差越候六兵衛殿も不被居候得え相咄し猪御馳走なと有之四ツ時分ニ相歸候事

同十日 陰雨強風甲寅

今日五ツ時ニ起候處朝立迄え風雨不嚴候得共八ツ時ニ相成候處中々難堪風雨ニを四ツ時ニ出勤八ツを頻ニ眠相成催候付一息寢候助(藤井)御越ニ候夜入近を喜三(税所)左衛門殿被參四ツ過迄被咄助(藤井)一樣同道ニを被歸候

同十一日 陰乙卯

今日四ツ時ニ出勤九ツ時新助兄仁禮新介殿同道ニを市見物差越八ツ前ニ歸家七ツ前を横山氏(安之丞)の一刻差越大鐘近を南林寺又々法樂相勤候由ニを

(二介)郡山氏加藤父上様御越被成候付同道ニを市など見物いたし左候を今晚罷歸候處父上様も御歸被成居即休息いさし候事

同十二日 雨天

今日五早朝を雨天ニを九ツ時を助(藤井)一介殿被參何をも拙者え他出不致七ツ過ニを御記録所を明日御用申來候故安心いさし今晚(三四)樺山氏衆御祖母様も御入來九ツ時ニ御歸家八ツ時ニ休息いさし候事

同十三日 白日晴天

今日五早く起床御用ニ付五ツ過ニ仕舞罷出候處小多くて出勤人無之丁度能加減ニを九ツ時前町田孫一郎殿(末川)久馬殿善左衛門取次役以系圖御家譜編集別勤改書役被仰付候例の如く御請書月番御家老取次御用人其外奉行書役は禮廻御家老え末川久馬殿御用人え田中善左衛門殿皆々同道ニを下方の衆え上方に上方え下方に廻り拙者え勇右衛門殿平八殿藤七郎殿(米良)甚介殿五人ニを先野崎氏の差越拙者一刻上山寺墓參いさし夫を又田中を通り

系圖御家譜
編集別勤改
書役ヲ命セ
ラル

亡姉ノ墓參